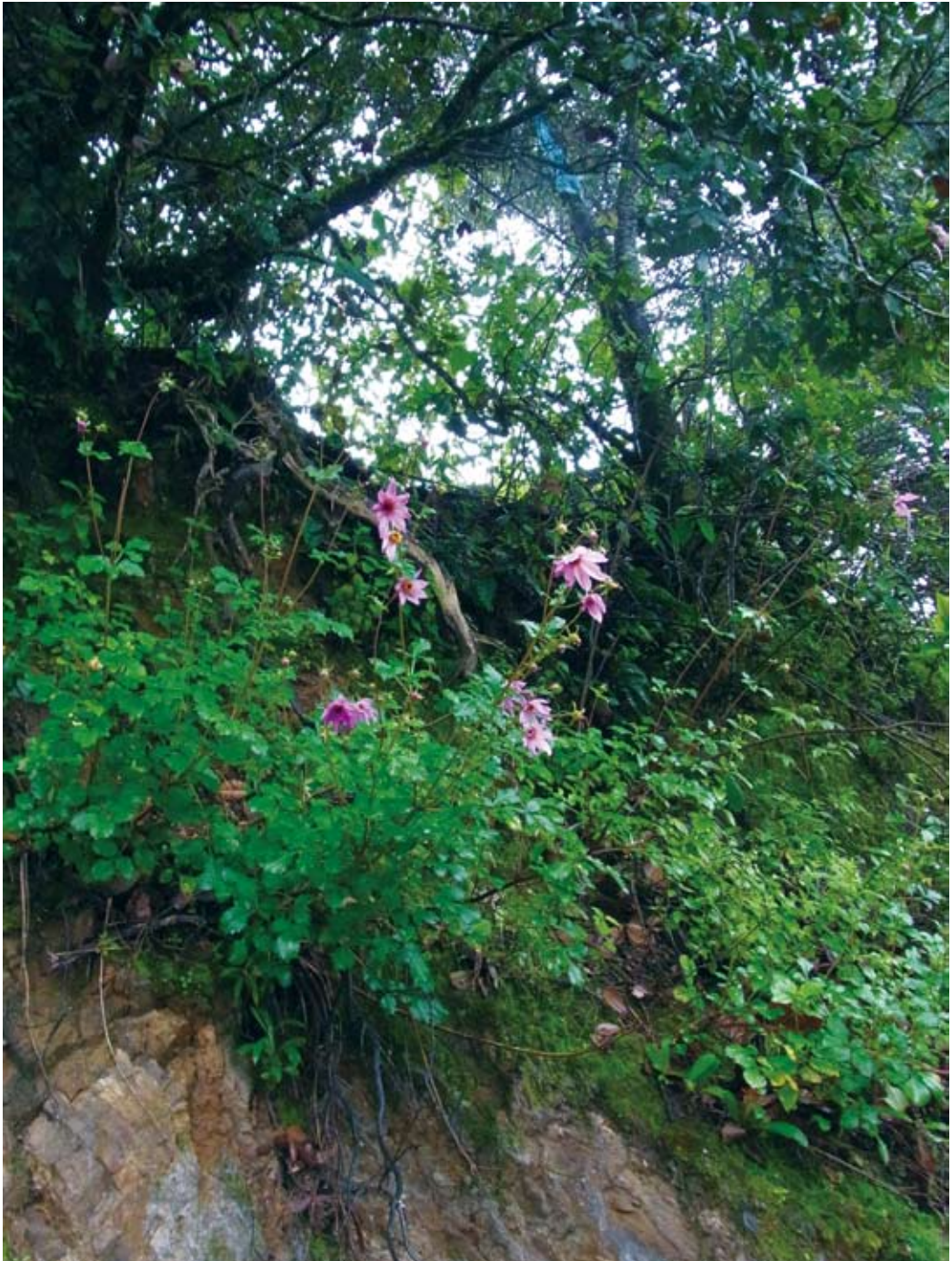


花葉

2011
No.30



花葉会発行



花に夢を託して

株式会社ミヨシ
小 黒 晃

諸行無常、変化し続けることは生きるということでもあります。また、変わらないもの、変わってほしくないことも数多くあり、変化に対応するには、変化しないことをよく見つめる必要があります。いきなり禅問答のようになってしまいましたが、花を愛でることは、昔も今も変わらないと思います。方法やアプローチ、プレゼンテーションなどはさまざまで、変化もあり、進化や反復も見られます。

このコラムでも多くの提案がありました。しかし、提案を続けるということは変わりません。

花の普及や啓発に当たって、私の場合は「風景も大切」ということを織り込むようにしています。植栽(植彩)だけでなく、店の陳列から利用までを含めて、アレンジや飾り方、配置によって、花の表情や受ける印象、そこからわき出るイメージは異なってきます。あたり前といえば全くその通りなのですが、この時に自然の原風景はぜひとも参考にしたいものです。花との接し方や求めるものは、人それぞれですが、ガーデニ

ングにおいても広がりをもたせ、ジョイントの可能性を多くしておくことは大切で、敷居を低くしながらもレベルを上げていき、ワンランクアップする工夫が必要です。

園芸にも、生産園芸と同時に景観園芸、また、育てる園芸と眺める園芸といった両方の面があります。時間的な変化も取り入れつつ、変わらないものを見つめつつ創りだしていくことは、小売りの現場と生産をつなぐひとつの足掛かりとしても役立つと思います。商品としてどのようなストーリー、ロマンを持たせるか、お客の夢をふくらませることができるかなど、正解のない問いを立てつつ、その都度違う答えを引き出して提案していくことは変わらないことです。花を広めることで、社会的コストが下がればいいなとも思います。

かつて、浅山英一先生が花カードの提案をしていました。これも氷山の一角でしょうが、見えないところを意識しつつ、新たな鉱脈を発見していきたいものです。花に夢を託して。

花 葉

2011
NO.30

目 次

禁無断転載

私の提案 花に夢を託して……………小黒 晃 (1)

植物の受精・発生過程の解析と野生遺伝資源を利用した形質改良の試み……………星野洋一郎 (2)

表紙解説 グリアのふるさと メキシコ……………山口 まり (7)

自叙伝抜粋 草花育種を目指して……………伊藤 秋夫 (8)

テーマガーデンの設計とボランティアによる花作りの指導に力を入れて……………林 角郎 (12)

バラの栽培と育種を楽しむ……………吉池 貞藏 (16)

施設と露地を組み合わせた効率的な鉢花生産をめざして……………平野 修司 (21)

デンファレ栽培 「ニッチから本流へ」……………眞鍋 哲 (24)

追悼 鶴島久男先生を偲ぶ……………野田卯一郎 (32)

追悼 在りし日の故・笠原貞男君を偲んで……………和田 大 (33)

花葉会海外園芸事情調査報告 花のふるさとメキシコを訪ねて……………小泉 力 (34)

花卉園芸学研究室レポート 終わりの始まり……………池田 佳織 (38)

園芸別科花組レポート 植物と向き合って……………半田麻衣子 (39)

花葉会海外園芸事情調査報告 モンゴル草原の旅……………田中 桃三 (40)

花葉会総会 (43) 花葉会賞受賞者紹介 (48) 花葉会賞受賞記念講演 (52)

花葉会会則・役員名簿 (47) 会員名簿の追加と訂正 (54)

植物の受精・発生過程の解析と 野生遺伝資源を利用した形質改良の試み

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

星 野 洋 一 郎

まえがき

私は1998年に千葉大学大学院博士課程を修了しました。在学中は三位正洋先生に師事し、バイオテクノロジーを利用した園芸作物の育種に関する研究を行ってきました。その後、北海道大学農学部附属農場に赴任し、現在は、同大学北方生物圏フィールド科学センターに勤務しています。現在取り組んでいる植物の受精・発生過程の解析に関する研究の概要とそれらを利用した野生植物遺伝資源を利用した形質改良の試みについて本稿で紹介したいと思います。

イントロダクション

交配育種において大きな問題となるのが、交雑不親和です。一般に植物の類縁関係において遠縁になると交雑しても後代を得られないことが知られています。大学院でも取り組んでいた遺伝子組換え技術は、目的形質だけを特定の品種に導入できる非常に有用な方法ですが、北海道では条例により遺伝子組換え作物の栽培が規制されるなど、研究面でも逆風を感じていました。附属農場に勤務し、現場に近い研究課題に取り組みたいと思っていましたので、北大では遺伝子組換え技術とは異なるアプローチで研究を進めることにしました。

交雑しても種子ができない「交雑不和合性・交雑不親和性」について、この問題を克服し、交配育種の可能性を広げることができれば、現在未利用の膨大な植物遺伝資源を使った形質改良が可能になると考えられます。そこで、不和合性を引き起こす柱頭や花柱の組織を取り除き、単離した生殖細胞どうしを融合させる技術「試験管内受精 (in vitro fertilization)」について研究を進めています。この研究が進めば、従来できなかった交雑組み合わせでも雑種を作ることができ、未

利用の膨大な植物の遺伝資源を利用して、食料生産やバイオマス生産などに関連した研究開発に貢献できると考えています。

試験管内受精を成功させるためには、卵細胞と精細胞を生きのまま単離する手法を確立し、植物の受精と胚発生がどのように形成されるかを詳細に調べる必要があります。また、受精の前段階として、配偶子形成・生殖細胞形成に関する課題にも取り組んでいます。加えて、被子植物特有の重複受精に生じる“胚乳”にも着目し、胚乳から植物体を再生させる技術の開発を行っています。これは、2倍体の植物が3倍性の胚乳を形成させることから着想し、胚乳と同じ倍数性の植物を短期間に育成する新たな倍数性育種法につながる可能性があります。重複受精の産物である胚乳は、栄養貯蔵器官としての機能を持つと捉えられています。組織培養による胚乳からの植物体再生系を利用して胚乳がどのように発生過程で分化するのかを探る研究に応用できるものであると考え、解析を進めています。

本稿ははじめに本稿に関連する受精・発生研究の概要について解説します。後半では、より具体的な形質改良の事例として、北海道地域の遺伝資源を利用した形質改良の試みを、ハスカップ、キイチゴ（ラズベリー）を題材に前半の受精の基礎的研究と関連させて記述したいと思います。

植物の生殖細胞を単離する研究

試験管内受精を成功させるためには、生殖細胞を生きのまま取り出すことが必要です。しかし、植物ではこれが難しいことが知られています。雌性配偶子である卵細胞は、胚のう内に位置し、その胚のうは珠心組織に取り囲まれ、さらに珠心組織は内珠皮、外珠皮に包まれて胚珠となっています。その胚珠は子房内に存在するので、卵細胞にたどり着くためにはこれら多く

の組織を取り除き、さらに卵細胞を同定する必要があります。卵細胞は一つの胚珠に一つしかありませんので、子房内の胚珠の数しか卵細胞がないことになりません。実験を効率的に進めるためには、一つの子房に多くの胚珠を持つものが有利かもしれません。卵細胞を単離する研究は、固定した組織を利用して行われました。胚珠を構成する膨大な細胞群からたった一つの卵細胞を単離するためには、はじめにそれを正しく捉える必要があります。胚珠内部の構造は非常に多様で、植物種ごとに胚珠の構造や内部形態は大きく異なります。卵細胞識別のために、胚珠内の胚のうの位置および形態、卵細胞の大きさや細胞学的特徴（核や核小体、液胞の特徴など）、卵装置 [卵細胞と二つの助細胞のセットを指して卵装置 (egg apparatus) と呼ばれています] の構造や助細胞特有の繊形装置（細胞壁が肥厚したものの）の性状を把握するための形態学的・組織学的観察が行われました。

三位先生のもとで行った研究でナデシコ属植物を扱った経験から、固定した胚珠を安息香酸ベンジルとフタル酸ジブチルの混合液に置換して組織を透明化させ、ノマルスキー式微分干渉顕微鏡による観察によって組織切片を作らずに胚珠内部形態を立体的に把握する手法が非常に有効であることが分かっています。これらの情報を踏まえた上で、酵素で細胞壁を消化し先端を鋭く尖らせて加工したガラス針を用いて解剖することにより卵細胞のみを取り出すことが可能となっています。これまで園芸作物のペチュニア、キンギョソウ、ユリ、アルストロメリア等で卵細胞単離の成功が報告されています。また、特徴的な胚珠構造を持つ植物種を選び、効率的に卵細胞単離を試みる研究もなされています。ルリマツリの胚のうは助細胞を持たないことから、卵細胞の識別が容易であると考えられ、また助細胞の機能について研究するよい材料であることから、この特徴を利用した卵細胞の単離が報告されています。また、トレニアでは、胚のうが珠孔部分から突出し、卵装置が露出した構造を持つことから、酵素処理によって簡単に卵細胞を単離できることが示され、またこの特徴を利用して重複受精を直接観察した研究がなされています。配偶子単離の研究材料として、トウモロコシにおいて活性のある卵細胞を効率よく単離する手法が開発され、試験管内受精を利用した研究が進んでいます。

一方、雄性配偶子は花粉内にあり、数も多く、卵細胞のように多くの組織を取り除いて取り出す手間も少ないため比較的容易であると考えられます。浸透圧ショックにより花粉を破裂させて精細胞のみを回収する手法が考案されています。また、酵素処理を組み合わせ、花粉をホモジナイザーで潰して精細胞を取り出す手法も報告されていますが、現在では、再現性、精細胞の収量および活性の点から浸透圧を利用した手法が多く用いられるようになりました。花粉には、成熟した時に2つの核を含むタイプ [2細胞性/2核性花粉 (雄原細胞と栄養細胞)] と3つの核を含むタイプ [3細胞性/3核性花粉 (2つの精細胞と1つの栄養細胞)] があります。2細胞性花粉の場合、花粉が発芽し花粉管を伸長することにより花粉管内で雄原細胞から精細胞が形成されるので、精細胞形成には花粉管を伸長させる必要があります。アルストロメリアを用いた私達の研究では、2細胞性花粉を液体の人工培地内で発芽させ、フローサイトメーター (DNA 含量を測定する実験機器で、核相の変化を捉えることができる) を用いて精細胞形成のタイミングを明らかにしました。この手法により、2細胞性花粉でも液体花粉発芽培地を利用することにより、容易に精細胞を捉えることができるようになりました。

単離した生殖細胞の融合：試験管内受精

活性のある卵細胞と精細胞が単離されるようになると、培養条件下における融合実験 (試験管内受精) が試みられるようになりました。卵細胞単離の研究が進んでいるトウモロコシを用いて、ポリエチレングリコール (PEG) やカルシウムを添加した溶液を用いて自然に融合を促す手法と電気融合を用いた手法などが試みられています。そして、Kranz の研究グループは電気融合により、単離した単一の卵細胞と精細胞を受精させ、胚発生を経由して植物体まで生育させることに成功しました。また、Holm らは受精直後のオオムギの卵細胞を単離し、同様に植物体を再生させたことを報告しています。植物の胚発生は胚珠内で進行するので、通常は発生過程を直接観察することはできませんでした。これまでの膨大な発生研究は経時的に作成した組織切片を丹念に観察して得られています。試験管内受精では受精直後から直接観察することができるので、胚発生の研究に非常に有用であると考えられます。こ

の試験管内受精の実験系を用いて、単離した配偶子および接合子の発生過程で発現する遺伝子の解析、間接蛍光抗体法による微小管の配向パターンの解析などに応用されています。

試験管内受精は、遠縁交雑の可能性を広げると同時に、雌性配偶子からの半数体育成の可能性も示唆しています。また、受精直後に単離した卵細胞や試験管内受精後の接合子へ‘マイクロインジェクション’により遺伝子の導入が可能となれば、抗生物質耐性等のマーカーを使わない形質転換系を確立することができます。植物の受精機構を解き明かす手段としての応用も考えられ、細胞どうしの認識、受精における助細胞・中央細胞の役割、重複受精のメカニズム、精細胞の細胞質ゲノムの排除の仕組み、配偶子で特異的に発現する遺伝子の解析などが進められています。試験管内受精を基盤にした研究展開により、植物の受精のメカニズムの理解を深め、発生・分化の人為的制御による植物育種技術全般への応用が期待されています。

アルストロメリアの研究

アルストロメリア（写真1）は、切り花や鉢花として利用される花卉園芸作物として重要な品目であり、特



写真1 研究材料の一つ *Alstroemeria aurea*

に北海道の気候条件が栽培に向いていることから北海道での生産が増えています。しかしながら、有力な外国品種の栽培には多大なパテント料を支払う必要があり、農業経営の問題点となっています。このため、オリジナル品種の開発が必要とされており、そのための育種として種間交配が行われていますが、種間で不和合性反応を示す組み合わせがあります。試験管内受精が適用できれば、広範な種間で雑種を作ることが可能となり、品種育成の強力な技術となりえます。

アルストロメリアは、胚珠サイズが比較的大きく、また、野生種15種で交雑親和性が詳細に記録されていることから、雑種育成を念頭においた人工受精研究に適した材料と考えて研究を進めています。私達の研究室では、アルストロメリアの生殖細胞を単離する実験系を開発するために、単一の細胞を吸入できる微動ポンプ付きのマイクロキャピラリーやスライディングステージを備えた倒立顕微鏡を整備してきました。これらの装置を使用し、胚珠の部分切除と酵素処理、ガラス針を用いた解剖により生きた状態の卵細胞の回収が可能となりました。さらに、胚珠への花粉管侵入を確認後に酵素処理を行い、接合子も単離ができるようになりました。精細胞の単離に関しては、先述のようにアルストロメリアは2細胞性の花粉を持つことから、同調的な花粉発芽を促す液体培地を開発し、精細胞形成のタイミングを明らかにすることができました。この研究から、花粉管内で3つの核が連携して挙動する male germ unit を形成することを明らかにしています。これらの成果を踏まえ、単離した生殖細胞を応用した研究を進めていきたいと考えています。

また、アルストロメリア科には、アルストロメリア属のほかに観賞価値の高いボマレア属、レオントキール属があります。アルストロメリアの変異拡大のために、現在、アルストロメリアとボマレア属、レオントキール属植物との属間交雑を試みています。ボマレア属植物との交雑では、低頻度ながら胚珠への花粉管侵入が認められました。しかし、胚の成長が途中で止まってしまうことが確認されています。胚珠培養により属間交雑後の胚を培養したところ、培養器内で小植物体は得られたものの順化に至る個体は得られていません。どのようにすれば正常な個体を育成することができるか、この課題に取り組んでいるところです。

北海道に自生する植物・ハスカップの育種

ハスカップ(写真2)は北海道に自生し、アイヌの人は不老長寿の妙薬として利用してきました。現在では、北海道の特産として菓子類、ジャム、果実酒などに利用され、栽培が広がっています。しかしながら、品種改良の歴史は浅く、野生株を栽培して生産されているのが現状です。最近では、ハスカップの抽出成分が眼の機能改善に効果があることが発表され、この成分を向上させた品種の育成や、食味の改善、果実の巨大化は、生産者および消費者にとって非常にメリットのあるものと考えられます。また、ハスカップの果実は1粒が1g程度と小さく、また果皮が破れやすいため、収穫に手間がかかり、貯蔵性が悪いことが問題になっています。そこで『皮が固い大きな果実を作る』ことと『味の良いものを作る』の二つの育種目標を設定しました。

ハスカップは北海道各地に自生していますので、これらの野生の植物を集めることから研究をスタートさせました。苫小牧の勇払湿原、函館近郊の横津岳、北海道東部の釧路湿原、別寒辺牛湿原、霧多布湿原、標津湿原などに探索に出かけました。私は山岳部で地形図を読んだり、植生を見たりすることに親しんでいた



写真2 ハスカップの果実

こともあり、野生のハスカップを探すフィールド調査を楽しんでやっています。

こうして集めたハスカップを調べてみると面白いことが分かってきました。ハスカップの野生集団には2倍体(染色体数18本)と4倍体(染色体数36本)のグループがあることが分かったのです。2倍体は北海道東部の一部(釧路湿原や別寒辺牛湿原など)にしかありませんが、ほかの地域では4倍体が広がっていました。どのようにしてこのような分布になっているのかは謎ですが、各地域のハスカップがどのように違うかを現在、DNA配列の違いを調べて研究しているところです。

2倍体と4倍体があることが分かりましたが、品種改良を行う上でこれは重要な意味を持っていると考えられます。一般的に、染色体数が増えると植物の組織や器官が大きくなることが期待できます。ハスカップの果実を大きくするために、倍数性育種(さまざまな倍数体を作る研究)を開始しました。そこで注目したのが、植物の胚乳です。胚乳の倍数性は重複受精によって、他の組織の1.5倍の染色体数を持っています。ハスカップの場合、2倍体の胚乳は3倍性(染色体数27本)、4倍体の胚乳は6倍性(染色体数54本)になります。そこで、胚乳のみを取り出して組織培養を行い、植物体にすることができれば、倍数性育種の新たな方法を確立できると考えました。胚乳は栄養貯蔵に特化した組織なので、これまでは植物にはならないと考えられてきました。それでは、栄養貯蔵を行う前のもっと若い段階の胚乳を使えばどうでしょうか。数千個の胚乳を培養し、植物生長調節物質の組み合わせを詳細に検討しました。すると数ヶ月経って数個の植物が再生してきました。植物の胚乳が植物体再生能を持つことが分かったのです。染色体数を調べると胚乳と同じ6倍体でした。新たな倍数性育種法の基本技術を開発したと考えられます。

現在までに交雑育種と組み合わせ、2、3、4、5、6、8倍体まで作ることができました。さて、こうしてできた倍数体の果実は大きくなるでしょうか。ハスカップは果実がなるまでに数年かかるので、現在、木が大きくなるのを待っているところです。

『味の良いものを作る』という育種目標のためには、甘くて味の良いハスカップの近縁野生種、ウグイスカグラ、ミヤマウグイスカグラとの交雑を進めています。



写真3 ハスカップとミヤマウグイスカグラの種間雑種の果実

この両種は濃紫色の果実をつけるハスカップとは異なり、きれいな赤色の果実をつけ、ハスカップよりも苦みがなく、甘みも感じやすい特徴を持っています。この近縁種を用いた種間交雑により、植物体を得ることができました(写真3)。1昨年からようやく果実をつけるようになっていきます。果実は、より洗練された甘

みとほどよい酸味があります。雑種個体は系統によりさまざまな形、味を示すことから、この中から品種候補となるものを選抜している段階です。

北海道産キイチゴを利用したラズベリーの育種

ラズベリー(キイチゴ)は洋菓子の素材として急速に需要が伸びていますが、日本では2008年に440t以上輸入されているにも関わらず、国内の生産はわずかに4.5t程度に留まっています。これは欧米で育成された品種が日本の気候風土に合わず、収穫期の高温多湿で果実が傷み、生産性が極めて悪いことが主因となっています。一方、北海道にはラズベリーに近縁のキイチゴ属野生遺伝資源(ウラジロエゾイチゴ、エビガライチゴ等)が多く存在しています。これらは北海道の気候でも病気にかかることなく良質な果実を实らせますが、小型で見栄えが悪く、そのままでは生産性や商品価値は低いことが欠点となっています。そこで、私達は欧米の主要な品種群(大果で生産性が高いが、病気に弱い)と北海道産のキイチゴ(小型だが北海道の気候に適している)を交雑し、北海道での生産に適した高付加価値の新規ラズベリーを開発することを目的として研究を進めています。現在、雑種1代目から生産性が高く、果実の形がよい系統を選抜し、北海道内2カ所で生産性試験を始めました(写真4)。このようなアプローチから、日本産の遺伝資源を有効利用するモデルとしても、研究を発展させていきたいと考えています。



写真4 ラズベリー品種とウラジロエゾイチゴの交雑雑種の果実

ダリアのふるさと メキシコ

山 口 ま り

ダリアは、多種多様な花型・花径・花色・草丈をもち、ガーデン用・鉢物・切花と多目的に栽培・利用され、現在では、2万とも3万とも言われる園芸品種がある。

その元になったダリアは、35種（27や30種とする説も）ほどある野生種のうち *Dahlia coccinea*、*D.pinnata*、*D.mercii* などの2～3種のみが関与しているだけだという。

ダリア属は、中米から南米北部中央の標高500～4,300 mの山地部に自生している。雨季の始まる5月ごろ発芽し、雨季の終わる11月に乾燥と低温のため地上部が枯れ、休眠に入る。最初にスペインにもたらされたダリアが採種されたというメキシコシティ（標高2,150 m）は、平均気温が1月は12℃、7月が21℃の温暖で冷涼な気候。雨季と乾季に分かれており、年間では1,200mmほどの降水量があるが、乾季の1月は6mm、雨季の6月が360mmほどである。メキシコシティのある北緯20度付近の日長は、最短の12月で約12時間、最長の6月で14時間である。

昨年の花葉会・海外園芸事情調査団は、メキシコの野生植物の調査（9月22～29日）が計画され、ダリ

アの野生種に出会いたいと参加した。メキシコは、ダリアの他にもコスモス、マリーゴールド、ジニアなど、馴染み深い園芸植物の原種の宝庫でもある。

最初にダリアに出会ったのは、メキシコシティにあるメキシコ国立自治大学の植物園にあった *D.coccinea*。園内のあちこちに半野生化したように咲いていた。ここは、花色の変異が多く、黄色から朱赤の花が見られた。

完全な野生のダリアとの出会いは、メキシコシティ郊外の標高2,400mの斜面にへばりつくように家々が並んでいる村落の中の開けた斜面。ここも *D.coccinea* であった。巨大なウチワサボテンや灌木と競うように、小さな集団を作り、草丈1.5～3mほど、朱色の一重の花を咲かせていた。周囲には、コスモス、ビデンス、ヘリアンサス、サルビアなどが見られた。

もう一つの有力な原種、*D.pinnata*（表紙写真）の自生地は、標高2,100～3,000 mの岩の多い斜面だと言う。メキシコシティから南東へ450kmに位置するオアハカ州州都オアハカ（標高1,550m）市内からの郊外の山地へ山肌を切り崩して建設された道路をピンナータを見るため専用バスを走らせた。標高2,000 m付近からコッキネアが現れた。2,500 m付近から道路わきの岩壁に、点々とピンナータが見られるようになった。コッキネアのように他の植物と混生せず、独立して、株全体の姿が確認できる。岩の表面に少量たまった土に根を広げ、はりつくように生えている。球根が表から見えているものもある。この写真を撮影したのは、標高2,800m付近。草丈50～80cm、雨季の真っ只中で、雨を避けるようにどの花もうつむいている。園芸種でも横向きに咲くダリアが多いのが分かった気がした。周囲には、宿根ルピナス、クフェア、ビデンス、ペンステモンなどが見られた。

サボテンと共に生育していることから、ダリアは乾燥を好むと記載されている書籍に出会うことがあるが、前述したように雨季に生育するため水を好む。但し、生育場所は水はけのよい斜面なので滞水は嫌う。原種の自生地を見て、ダリアの性質を再認識した。



斜面に咲く *Dahlia pinnata*

からタキイ種苗で、花の育種スタッフを探しているが
お前どうだとの電話があり、本来の自分の目的でもあ
り、思い切って行くこととしました。ただ私は学生時
代から体重 48 キロとやせて体力もなく、この体でハー
ドな仕事で名高いタキイで耐えられるかなとの不安は
ありました。当時タキイは京都の長岡研究農場を滋賀
県甲西町に移転させる大工事が進められており、花卉
科が野菜より 1 年早く、私の入社した 1967 年にまだ建
設途上の新農場に移転することになりました。出来立
ての新農場は大きな石がごろごろした、排水の悪い開
墾土。それから 10 年ほどは植え付け前の整地毎に頭ほ
どもある大量の石出しに散々苦労させられました。体
力は何とか耐えることができました。

入社 3 年目には私も花育種の大きな部分をまかさ
れることとなり、千葉大の大先輩である治田辰夫場長
からは「AAS に入賞して世界に通用する品種を作れ！」
と強力にハッパをかけられ、不安ながら嬉しくもあり
ました。ハボタン、キンギョソウなどは別の担当者が
続けており、私はそれ以外のパンジー、ストックなど
の育成を、本社に移った前任者から引き継ぐことにな
りました。今後の花壇苗草花育成目標としてはナーセ
リーでの大量の一貫生産の時代を考え、形質の揃った
F1 品種を狙うこととし、これからの品目としては当時
華々しい F1 品種の育成が続いていたジニア、マリゴ
ールド、それにダイアンサスも加えました。育種は年月
を要する仕事ですが私は入社が遅く、それだけ
在職期間が短いわけで人一倍仕事を急ぐ気持ちが強
かったようで、世代促進など育種年限の短縮にはでき
る限り努力しました。また使える施設面積も限られて

いたので、狭い面積でいかに効率を上げるかと、小
さな鉢植えにして密植したりと栽培にもいろいろ工夫
しました。

パンジーのインペリアルブルーがタキイで初めての
AAS 入賞品種として発売された翌年の 1974 年、私は
海外研修の機会を与えられ、アメリカの育種農場での
研修や欧米の大学、研究所、種苗会社、園芸植物園な
どを 5 カ月ほどの期間をかけ体験、視察をすることが
出来、これはその後の自分の仕事に計り知れない有益
な体験になりました。何十町歩に及ぶカリフォルニア
のジニア、マリゴールドの F1 採種圃場には唖然とさ
せられました。これに対抗して日本で如何にしてこれ
ら草花の F1 を採種、販売できるかと頭を抱えたもの
です。育成年限の短縮努力は一応の功を奏して品種育
成も進み、パンジー以降 5 年連続の AAS 入賞 (内定)
を果たすことが出来ました。毎年 1 品種は AAS か F
S (フロロセレクト) にエントリーできるようにとの
15 年ほど先までの育成計画を立てましたが、さすがこ
れは達成出来ませんでした。ただ出品した品種の入賞
率は非常に高かったと思います (主な育成品種は花葉
28 参照)。タキイは花では後発の会社、そこで生産者
の目を引く特徴ある品種の育成にも努めました。種子
色選別でオールダブルとなるストックのホワイトワン
ダー、葉型選別でダブルとなる低温のいらぬ矮性の
ピグミードワーフ、種子系では初めてのランタンキュ
ラスのポットドワーフ、低温のいらぬ極早生矮性のケ
イランサスのベガなどです。



オランダ、FSの審査圃場



ジニアの無弁型雄性不燃 (左) と正常花 (右)

仕事を振り返って

職務育種はアイデアとスピードの勝負だと思います。育種品目には競争品目、開発品目、それに偶発品目といえるものがあります。競争品目とは各社が育種を競っている、マーケットの大きな主要品目のことで、育種目標は各社似たものに成らざるを得ず、競争熾烈な中でより早く開発を進めるスピードが要となります。ただ、これまでに無い変わった形質をアイデアで生かすことが出来れば他社より有利な品種が出来るでしょう。世紀の銘品種、ジニアのピーターパン (AAS金賞) に対抗したドリームランド、パンジーのインペリアル

系の各種新花色や、ジニアで初めてのダリヤ咲きF1サン系などです。マリゴールドは撤退を余儀なくされ、競争に負けた例です。

開発品目とはこれまであまり関心を持たれていない草花や形質のなかに隠れた価値を見出し、目新しい品種を開発することです。それだけにリスクも伴いますが、うまくいくと特異な品種が出来て販売にも有利となります。育種の醍醐味です。先述の特徴ある品群がこれになります。更に、資源探索での採集品もこの類に入るでしょうか。ウルグアイの山中で見つけたニールンベルギアは殆ど育成の手間をかけず、モンテブランコの名でAAS、FSの両賞を獲得しました。

もうひとつ実際の育種に携わって面白いのは偶発品目です。草花の育成途中には突然変異や形質の分離などで特異な形質が出てくることがあり、これら形質は目的外として見落としがちですが、すかさず有用性を見出し育成開発に採り上げるアイデア心を生かせば、飛び抜けた品種が生まれる可能性と面白さがあります。まさに瓢箪から駒です。先述したストックの連鎖利用によるオールダブルのホワイトワンダー、それに虫が勝手に交雑した種間雑種から見出したナデシコのテルスターなどがこの例です。

企業の景気が悪くなると開発品目には圧力が上がり、マーケットの確実な競争品目に絞られがちになるわけ



ストック ホワイトワンダー 黒種を選ぶと紫一重 (左)、茶種を選ぶと白八重 (右) が咲く



キナバル山登山途中で見た巨大なウツボカズラ

で、担当者にとってはつらいところ。幸い私が仕事をしていた時代は会社も比較的順調で、仕事はやり易かったといえます。私は入社が遅く、在職期間が33年と短かったことが残念です。この間育種に専念できた期間は20年程!! あと10年専念出来れば、倍ほどの仕事は出来たのに、今思うと残念な気がします。

後半は会議その他管理職的な雑用?が増え、主要育種品目は若い社員に引き継ぎがざるを得ませんでした。会社組織の中では仕方のないことでしょうか。全く育種から離れるのも寂しいので、手のかからない固定種目的のマイナー品目に目を向けました。この時期に創ったものとしては、バルドーサムのスノーランド、ジニア・リネアリスのプチランド、ケイランサスのベガ、リナリヤのグッピーなどがあります。

退職後、いったい在職中どれほどの品種を創ったのかと数えてみると、なんと150を超える品種になりました。当時はタキイ独自品種といったものが殆ど無かったので、急ぎ品揃えの必要もあったのです。何とかものに成ったのはこのうち半分程度でしょうか。これら以外にも育成途中で見通しつかず断念した品目もかなりあります。育種には無駄もつきものです。ただどの辺で見切り判断を付けるかは大切だと思います。

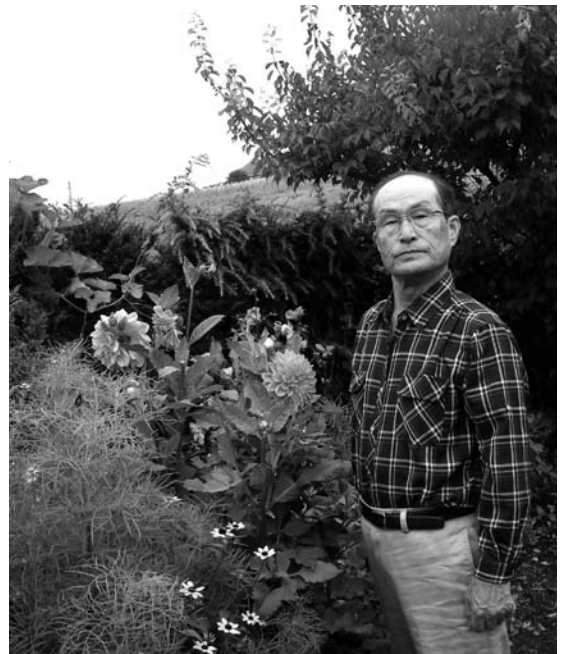
退職後は別の世界で

最後の仕事として1992年、長野県富士見町での高冷地農場建設に単身赴任しましたが、自然豊かな八ヶ岳裾野のこの地がすっかり気に入って、退職が近いこともあり、標高1000mのこの地に住み着きました。おかげ

で近年の夏、都会地が記録的な暑さで悲鳴を上げているのにエアコンなしで快適な暮らしを楽しんでいます。冬は寒いですが最近の家は断熱がしっかりできているので、夜間戸外がマイナス10度以下に下がっても、暖房を切った部屋の出窓に置いた洋蘭が元気に咲き続けてくれます。

2000年に退職しました。在職中にカリフォルニアのサンタローザにあるといわれるバーバンク記念館を訪れることが出来なかったのは誠に残念です。育種もいいですが退職後は別の趣味を生かしてみたいと考えていたので、退職はむしろ待ち遠しく、迷いはありませんでした。山歩き、絵画、百姓、木工や彫刻、クラフトづくりなど脳を活性化させ、ボケ防止対策も含め楽しんでいます。とくにクラフトで開発した「ヤジロッチ」はヤジロペーの原理を応用した昆虫や小鳥の面白いオーナメントで、近くのクラフトフェアに参加したり、昆虫博物館から呼ばれて工作教室で作らしたりと、子供たちに大人気です。

数年前腰痛を起こし、無理な山歩きは出来なくなりました。2005年にボルネオ、キナバル山(4095m)に登ったのが本格的登山の最後になりました。今は八ヶ岳山麓の自然保護活動などに参加しています。こんな生きざまでもよろしかったら一度お立ち寄りください。



近影

テーマガーデンの設計と ボランティアによる花作りの指導に力を入れて

林 角 郎

館山駅前花壇のその後

「花業」の前号で、JR館山駅前花壇の設計を依頼され、さらに花壇にテーマ性を持たせている事例について述べました。平成22年の春夏作は予定通り、その年の千葉国体にちなむ設計で植栽しました。設計としてこれも前回述べた通り、サルビアの白と青の品種で千葉県章を表現しましたが、青の品種がやや不揃いのまま過ぎ、またマスコットのチーバクンを示すセンニチコウの植え込みは平面を横から花壇の弱点のため、やや目立ちませんでした。しかし、市内のレジャー施設のファミリーパークからチーバクンの大型トピアリーが持ち込まれ、これと白の千葉県章と合わせ、ほぼ目的は達せられました。

その後、11月以降は前号にも示した計画の通り、江戸時代にこの地域に起きた万石騒動と言われる農民騒動で犠牲になり処刑された3人の義民を記念する300年祭がこの年の11月20日に行われたため、安房三義民花壇と名づけました。

デザインとして中心に3稜の星形を作って、アイスランドポピーのこれまでも使っているカクテル系のイエロー、オレンジ、レッドの3品種を植え、その3稜の先端に犠牲となった3人の名主の名前を記した白木の板を立てました。その周囲には関係した27の名主たちが責任者がわからぬように訴状を記した傘型連判状にちなみ、9色のビオラ品種を3繰り返しで配した27の扇型図形で植えました。このビオラの品種と花色

の配置は苗の育成をお願いしている落合哲平さんにお任せし、サカタのタネから新しく発売されたフルーレシリーズの9色の品種を利用しました。この品種選定は扇型配置の図形とうまくマッチし、花は5月末まで見事な状態で咲き誇り、9色のビオラの花がそれぞれの花色を示して盛り上がりました。このため、この花壇は館山市内でもかなり評判を呼び、館山市長からも感謝されました。

次の平成23年度の栽培はやや遅れて、7月11日に植えましたが、これは3月11日に発生した東日本大震災の被害に関連して被災地の援助激励をテーマとしました。実は事前には、前号中にも述べたように、館山市の港湾整備事業のPRをテーマにしていたのですが、今回の事情でそのまま海と陸地の表現を利用することとしました。

写真に示すように、3方向に外側から3区分の円を描き、一番外がブルーのイソトマで海を、その中をジニア‘プロフュージョン’の白で砂浜を、オレンジの品種で市街地を示しました。この原稿を書く8月末にはイソトマの生育が遅れていましたが、いずれ花で覆われて、秋末まで続くものと思われま

す。そのあとは前号に述べたように市内西岬地区のお坊さんが大正2年に安房地域で初めてキンセンカを栽培して東京の築地市場に出荷し、この平成25年が100年目に当たることと、同じ西岬地区のKKクロカワストックで育成したストックの全品種による切花が全国主要市場のストックの8割以上を占めているという日本花



平成22年冬
館山駅前安房三義民三百年祭記念花壇



平成 23 年夏
海と市街地を示した東日本大震災援助激励花壇

普及センターの調査結果を記念して、キンセンカとストック、そしてやはり館山市神戸地区で特産のアイランドポピーを加えた 3 種を植えて、安房花作り 100 年記念花壇とする予定です。この安房の花は夏の海と市街地の花壇と共に、2 年間行う予定にしております。

ボランティアの仲間と公民館の花壇栽培を実施

なお筆者としてはもう一つ館山市中央公民館の花壇の栽培をボランティアの人々に指導しており、この方に目下力を注いでおります。

この花壇栽培は平成 18 年春に、この公民館にある約 90㎡ほどの花壇の栽培が、当時の職員の手では不十分であったため、それを引き受けて作り始めたものです。当初は簡単に考えて、ジニアやコスモス、アサガオの苗を作って植え、その頃 30 人近いサークルの人々に、月 1 回、花作りの講義をしていたため、その人たちに講習後に除草をお願いしました。でも準備不足もあって、あまり同意が得られず、その作業依頼は中止しました。

このため、会の名称を「ふれあい花壇の会」とし、新しく会員を募集して活動することにしました。この会の作業として週 1 回、水曜日の午後 1 時 30 分から 2 時間程度作業をし、その後休憩を兼ねて関連する話をする事とし、この形で現在まで 5 年間続けて行っています。

ただ会員は、当初は定着せず、参加後間もなく出席が遠のき、やがて来なくなるという例が多く出ました。しかしその中で変わらず協力する人もあり、また途中 1 年間にわたり、別に、毎月 1 回、折々の材料をもとに講習会を行って会員を募った結果、入会者が増え、会員に定着する人々も多くなって、現在は 20 名以上の会員が毎回 15 名程度出席して作業しています。

この人たちに対しては、単なる労力奉仕という形ではなく、ほぼ毎回の作業の後の休憩時間に、その日の

作業に関係する技術の問題を資料と共に講義しています。そして各自に、全員共通の栽培をすすめています。現在は大輪朝顔を栽培し、8 月にスカシユリの球根冷凍抑制栽培を行って、秋の文化祭にそれぞれ持ち寄って展示会を行っています。また、公民館もこのボランティア活動に対応し、研修のため特別に公民館のマイクロバスを都合し、年 1、2 回の日帰り研修旅行を行っています。

なお、作業面では、雑草の発生を防止して除草労力を削減するため、花壇の全面に黒ポリを張り、そこに苗を植えて栽培しています。これにより雑草の発生はかなり抑えられ、労力は大幅に軽減されました。

また栽培する品目は、当初は一年草のみでしたが、育苗の労力で行き詰まり、常に手遅れの状態となったため、段々に宿根草に切り替え、平成 23 年度の現在は、ほぼ全面的に宿根草類を植えつけ、一部で夏作の一年草と冬のパンジー等で植栽を行って栽培しています。

また、宿根草は、後述するように花業会会員でもある、KK ミヨシの小黑晃さんに変なお世話になっております。他に、筆者が家で栽培していたサルズベリやアジサイも植えています。この結果、育苗労力をかなり減らすことができました。

さらに最近になって会員が増え、労力的に若干ゆとりができ、小黑さんからいただいた苗の中で日陰地に向く種類が若干あったため、平成 23 年の春に、当初から栽培した花壇とは別に、一段高い本館建物南側の庭に数本ある樹木の幹の周囲に小花壇を作り、これをシェードガーデン見本園としました。加えて建物の北側にも若干植え込みの床があり、別グループがジンジャーを栽培していましたので、そちらにも増殖した宿根草の苗を提供して、これをシェードガーデンのひとつとしております。

なお栽培する一年草の育苗や株分けした宿根草の株分け苗の培養のため、育苗床が必要となりました。当



斑入り植物などを使った樹下のシェードガーデン

初は雑然と置いていましたが、かなり見苦しくなったため、これも黒ポリを敷いた上にポットのトレイを並べ、パイプに散水ノズルをつけたノズルライン方式による灌水装置を作りました。この装置で灌水の時間はかなり短縮できましたが、反面装置に故障が多く、その対応で少し苦心しています。

展示栽培と地方紙を利用した広報活動

この花壇栽培の目的の第一として、なるべくいつでも花が豊富に咲く状態を想定し、最初は花期の長い一年草を選びましたが、その後、宿根草に切り替えても年内に4ヶ月以上は開花する種類を選ぶようにしております。これには新品種などを検討する必要があるため、それらを並べて植えて展示しております。このため通路に面して長い床を作り、そこに各品種を並べて植えつけ、ラベルも全品種につけて、公民館の利用者が道を通りながら品種名がわかるようにしています。

この中で、平成23年にはペチュニアの花期の長い新品種の展示栽培を予定し、品種を集めていきましたが、落合さんも同じ考えであったため、協議して22品種を栽培することとしました。そもそも安房地域は最近夏と冬の雨量が少なくなっているため、今年もかなりの猛暑に見舞われ、このため枯死する品種も出ましたが、反面、元気よく伸びている品種もかなりあり、品種による生育の違いが明瞭に見られています。この比較はプランター栽培でも行っており、その結果とも合わせて、今後検討したいと考えています。このような簡単なトライアルもこの花壇で行うよう考えております。

なお、このペチュニアの大型品種は開花期間が長く、そのまま株は越冬して翌年も同様に生育するため利用上好都合で、とくに花色の豊富な点もかなり魅力です。ただ実際に作ると、品種による生育にかなり違いがあることが分かりましたが、これはその生育差を植えつ



ペチュニアの品種展示床と宿根草の花壇

け間隔や栽培容器の違いで利用すればよいものと考えます。すなわち、枝の伸びのよい品種は大きい花壇や栽培容器に植えて大型な状況で利用すればよく、枝の伸びの悪い品種はそれぞれの伸びの程度に対応した容器や利用方法で使えばよいことになります。これらの品種間の生育差はさらに詳細に検討されることを願っていますが、当面、今回のトライアルで大略の傾向が分かるものと思われ、今後の栽培で検討したいと考えております。

なお、これらの比較栽培と共に、この花壇で経験する栽培の結果について、折にふれてサークルの会員に説明し、栽培に関する知識を深めるようにしております。このように講義のみに頼らず実技や実物から学びとらせる指導も当初からねらった学習方法ですが、これもかなり効果を発揮し、会員各人の技術は確実に向上しているように思われます。

なお筆者は別に、昨年平成22年の春から、地元地方新聞社である房日新聞社からの依頼を受けて毎月1回、約1200字程度の新しい花作りの記事を入れており、2〜3枚のカラー写真と共に掲載されていますが、その中に実例としてこのふれあい花壇の状況とそれから考えられる技術事項も述べて普及広報のひとつとしております。

協力者と種苗提供でお世話になった方々

この花壇植栽の活動は筆者自身が公民館の職員と相談して独自に始め、活動を進めてきましたが、間もなくこれまでも述べている落合哲平さんに話して賛意が得られ、同氏の農場で生産された苗もしばしば提供していただいております。とくに今年度の場合ペチュニアの利用についての意見が一致して、栽培や、今後の植栽方法などについて種々話し合っております。この公民館の活動とは別に、筆者は市の都市計画課から



1株で1mの床幅からさらに広がるペチュニア
‘ウェーブ ミスティライラック’

現在進めている海岸近くのプロムナード周辺の植栽についての相談を受けていました。この道路脇につくられた植え込み容器に植える花として落合さんの意見から花壇用ペチュニアの植えつけを市に提案。落合さんご自身がすべて栽培を行って、この夏中、かなり見事な状態で咲き続けました。このようなことで公民館の植栽活動とサークル員の指導について、今後もさらにご協力をいただきたいものと考えています。

その他公民館の植栽活動に関して、肥料、腐葉土、堆肥、その他管理用の資材関係は必要なものを購入していただいております。しかし種子や苗を購入する種苗費は会計上の購入ルートが不備で、予算もないため、独自に調達してきております。この中で必要性の高くなった宿根草の苗については、独自に購入するほかに、以前からも知り合っておりましたKKミヨシの黒見さんをお願いして各種の苗をサンプルとして何回かお送りいただき、これが花壇の整備上大変役に立っております。

また、一年草や宿根草の種子については以前の第一園芸からの関係で、KKムラカミシードから、これも試作品として少量あての提供をいただいております。とくに宿根草類の場合、成苗での購入はかなり高値となるのに対して、種子から育苗した場合、一度にかなりの量の苗の育成ができるため、キキョウ、ガザニア、オダマキなどで利用させていただきました。

以上に述べた各方面の方々のご協力で深く感謝申し上げますとともに、今後のご指導、ご援助をお願いいたしたく存じます。また花葉会の皆様にも、この栽培の状況を認識していただくと共に、ご助言、ご指導を折に触れていただけましたら、幸いに存じます。

ボランティア活動について

最後に筆者自身からすれば、現在この花壇の栽培に



落合哲平さんの植込みによる館山市内海岸のペチュニア植栽

協力していただいているボランティアのサークル会員に対しても多大な感謝の気持ちを持っております。正直言って、筆者はすでに84歳の誕生日を過ぎて事実上老齢の域に入っており、体もかなり不自由な状態で、この花壇の栽培も作業を指揮するだけの状態となっています。会員は全員が筆者の意図を十分わきまえ、確実に作業を進めており、その成果が栽培の結果となって示されております。

そこでボランティア活動という行動について考えている点がありますが、ボランティアの行動は自らの意思で、公共のために力を尽くすという行為ですが、その中に単純に作業だけに参加して協力する単純型タイプと、その作業の目的や内容を理解してさらに積極的に行動をすすめるという開発型の2つに分けられるように思われます。これはその行事や行動をリードする指導者にも当てはまることで、単純に個々の作業を指導するだけの場合と、花壇栽培であれば新しい栽培方法や材料を探し求めるという開発型指導とが存在するように思われます。指導者が開発型として行動し、ボランティアの参加者がそれを理解して協力し、積極的に行動すれば新しい形の花壇栽培が出現し、それが社会的にも大きく貢献することになるはずで

筆者の考えとして、今後公共的な場面における花壇植栽事業は予算的な事情から、可能な限りボランティア活動により行うことが望ましいと思っておりますが、その際にはとくに、以上のような積極的な開発型ボランティア活動が行われることが望ましいと考えております。今回の公民館の花壇栽培もつきつめればそのようなボランティア活動のテストケースとして行ったこととなりますが、これまでの実現の可能性は十分あるものと考えられます。

バラの栽培と育種を楽しむ

吉池 貞藏

この度の震災にあたっては、岩手県在住ということで、遠方からお手紙やお電話をいただき大変恐縮しておりますが、私の所は県中央の内陸部ですので、津波の被害もなく、地震も物が落ちる程度で済みましたのでご安心ください。

本来ならば、県内の花き生産者の被災状況と今後の対策等についてお知らせすべきところですが、十分な資料も持ちあわせておりませんので、今回はこれまで趣味で手がけてきたバラについてふれてみたいと思います。

1. バラとの出会い

学生時代に園芸学部 に在籍していたおかげで、創立当時の日本ばら会展をはじめ、園芸関係のアルバイト等も体験でき、大変恵まれた環境にあったと思っています。この中で、バラをつくる動機を与えてくれたのもその1つである。

大学3年の春、日本橋三越の園芸部でアルバイトを探しているという情報を得たので、これに参加することにした。昭和28(1953)年頃なのでまだ食糧も十分ない時であったが、ここの売店ではもうすでにバラ苗を販売していた。1株200～300円程度と思ったが、1株買って信州の自宅の庭に植えた。品種は今でも記憶しているが、‘マダムメリーキュウリ’という黄色のバラであった。夏に帰省した折にその咲いている姿に驚いた。

アルバイトが縁でバラ苗を納入している業者の方とも知り合うことができた。私が長野県の生まれということから、夏休みに野ばらの株を掘ってくれないかとの話が出た(当時はまだ現在のように実生から台木をつくって接ぐのではなく、山野に自生している野ばらを掘り取って接ぎ木する状況であった)。それではやってみようと思うことで、この年の夏は、野ばらの株掘りをした。約3,000株は掘ったと記憶している。おかげ

で野ばらはどんなところに自生しているのか、どんな場所に自生している株が台木に利用できるかがよくわかった。

せっかく野ばらを通して業者さんと知り合ったので、この機会に是非接ぎ木を教わろうとお願いしたところ、快く引き受けてくださり、実習することができた。夏だったが、帰宅して接いでみると、予想以上の活着と生育の早さに驚いた。

在学4年の時は、松戸の農家の空き地の一部を借り、接ぎ木したバラを育てた。奇妙に今でもその当時の品種は鮮明に記憶に残っている。

昭和31(1956)年春に盛岡にあった農業高校に勤務することになり、赴任した。農業高校では主に花の教科を担当したので、早く、地元で産業となる花を育てたいとの思いが中心で、趣味のバラにはあまり心は動かなかった。しかし当時盛岡にも岩手バラ会は発足していたので、早速その会に入会したが、特別な活動はしなかった。しかし熱心な栽培家中村七三氏と出会い、栽培状況を見せていただいたり話を聞くことができたのは大きな収穫であった(氏は1946年アメリカオレゴン州ポートランドの国際ローズショウで日本で初めてグランプリを受賞している)。

2. 趣味のバラ栽培

私が趣味のバラ作りをこちらで始めようと思った動機は、昭和45(1970)年10月の岩手国体である。10月上旬は岩手では秋バラの最も美しく咲く時期である。この時期に是非、全国の来県者に岩手のバラの美しさを紹介しようと思うことで岩手バラ会は張り切ってバラ作りに挑戦した。私も農業高校から、県の園芸試験場に移り、小さな住居と庭を確保できたので、早速これに挑戦してみることにした。こうなると、夜遅く帰ってきて、必ず懐中電灯でバラを見てから休むほどだった。

このためか、昭和 44（1946）年秋の岩手バラ会の展示会では初出品（新人の部）で3日間連続1位の賞をいただいた。これが熱病となり、数年間続いたが、その後の転勤等からバラはしばらく遠のいた。

平成 2（1990）年県職員を退職し、県の花きセンターで手伝いすることになり、時間的な余裕も出てきたので、再び趣味のバラ栽培を開始し、県内のコンテストにも出品を始めた。しかし、それもつかの間で今度は自宅から 100 キロほど北西にある安代町（あしろまち 青森県と秋田県の県境）に新設された安代町花き開発センターに勤務することになり、またバラ栽培は中断しなければならなくなった。

この頃自宅のすぐわきに大きな道路が通ることになり、バラは全部取り除かなければならなくなり、どうしようかと迷ったが、幸い勤務場所より 2 キロほど離れた山あいの畑を貸してくれる人があったので、捨てきれないで迷っていたバラを移し、パイプハウスを作り、そこで栽培を始めた。

この年の秋からは県内のバラ展のみでなく、勸日本

ばら会の展示会にも見学に行くようになり、バラ作り熱は再び高まった。

ここは岩手県の北西部で標高 450 m 前後なので自然開花期は県の中心部より約 1 週間は遅れるので、県の春の展示会には自然状態では間に合わなかった。だがパイプハウスに 1 枚ビニールを被覆すれば、ちょうど開花に間にあうことも分かった。この程度の保温では日本ばら会の春の出品は困難だが、秋の展示会には出品できるようになった。そこで平成 8（1996）年以降は秋の全国展には毎年出品できるようになった。

趣味のバラ作りでも一度くらいは全国展で 1 位をとってみたいと思っていたが、平成 16（2004）年秋、広島県福山市で開催された勸日本ばら会全国大会では念願の会長賞をいただき、思い出の年となった。数日後、当時静岡大におられた大川先生からも「中国新聞」の記事を見たよとのお手紙もいただいた。

安代町での勤務は平成 15（2003）年に後継者も決まり、退職することになり、現在の花巻市に移り住むことになったので、バラもまた移動することにした。気



「手児奈（てこな）」第 15 回世界ばら会議バンクーバー大会ワールドローズショウで ベストローズ賞を受賞



第 12 回国際バラとガーデニングショウで大賞を受賞した「白秋」と筆者

表1 栽培関係受賞概要

受賞年	受賞品種	受賞内容
2004	コロラマ	第23回日本ばら会全国大会 会長賞（注1）
2006	手児奈（てこな）	第8回国際バラとガーデニングショウ 大賞（注2）
2009	手児奈（てこな）	第15回世界ばら会議バンクーバー大会 ワールドローズショウ ベストローズ賞（注3）
2010	白秋	第12回国際バラとガーデニングショウ 大賞

（注1）会長賞：大輪1花の1位に贈られる

（注2）大賞：各カテゴリーの最優秀賞を受賞した作品の中から選出

（注3）ベストローズ賞：各カテゴリーの1位を受賞した作品の中から選出

表2 国内でのバラ新品種コンクール実施状況

コンクールの名称	主催者	場 所
国際バラ新品種コンクール	財団法人日本ばら会東京都神代植物公園	東京都神代植物公園
ぎふ国際ローズコンテスト	花フェスタ記念公園	岐阜県花フェスタ記念公園
国際香りのばら新品種コンテスト	国営越後丘陵公園	新潟県国営越後丘陵公園

（注）岐阜県花フェスタ記念公園でのローズコンテストは一時休止していましたが今年（2011）から再開

象を調べると、ここは冬も割合日照量も多いので、春も工夫をすれば当方の開花より約1ヵ月早い日本ばら会の展示会にも間にあうのではなかろうかと考えた。パイプハウス二重被覆に水筒（すいふう）マルチ等も加えると無加温パイプハウスでも当方の開花期より約1ヵ月早い5月中旬に開花することが分かった。平成17（2005）年の第7回国際バラとガーデニングショウ（会場は西武ドーム）以降は毎年春秋出品し続けている。こうなると毎年仲間もふえ、春秋2回は仲間の顔を見たくらい出かけている。たかが趣味のバラ作りと思うが入ってみると奥は深い。育種の楽しみとは別な楽しみがある。

表1は栽培コンテストの主要な受賞記録である。

3. 育種への試み

平成8（1996）年に安代町で再度、趣味のバラ栽培を始めるにあたって思ったことは、栽培と同時に育種もどうかということである。

ガーデン用のバラは大部分は四季咲き性でありながら一般家庭では秋に咲いているバラを見ることはほとんどない。マレに咲いているのは‘クイーンエリザベス’ぐらいである。そこで、これからのバラの普及は、わが国では耐病性品種の育種ではないかと思った。しか

し世界には大きなナーセリー等で大勢のブリーダーが長年月、工夫を重ねて育種をしているのに、この歳になって始めてもどうなるものかとも思った。だが、反面バラは、播種してから5～6ヵ月で開花してくるし、栄養繁殖も容易なので、場合によっては先輩育種家にも思ったより早くに近づけるのではないかとも思い、「ダメモト」と思い、始めることにした。

平成10（1998）年には日本ばら会でも“育種の会”が発足したので、そちらにも顔を出すことにしている。大きな刺激となったのは、平成17（2005）年岐阜県で開催された「世界バラ育種シンポジウム」である。ここでは世界の主要なバラ種苗会社からの発表があったが、その大部分の会社の今後の方向は、耐病性と香りを中心になるだろうとのことであった。

私が最初に試みたのは、以前から病気に強いと聞いていたつるバラの‘ハンブルグフェニックス’である。これをオープンで採種し、これを播種したところ、予想以上のものが出現することが分かり、大変興味がわいた。そこでこの実生株のうちの有望と思われる1株に‘ゴールドマリー84’（F1）と交配したところ、12果ほど結実し、20粒ほどの種子が得られた。このうち発芽したものは15粒、この中で有望と思われる1株が後日岐阜県にある花フェスタ記念公園で銀賞をいただ

表3 育種関係で受賞した品種

受賞年	受賞品種	受賞内容
2007	ファミー	第7回ぎふ国際ローズコンテスト 銀賞 世界バラ会連合賞(注1) 勸日本ばら会賞(注2)
2008	南部ざくら	2008年度 JRC(日本ばら会国際新品種コンクール) 銅賞
2009	真宙(まそら)	第31回越後丘陵公園「国際香りのばらコンクール」金賞及び国土交通大臣賞(注3)
	ノースフレグランス	同上コンクール 長岡市長賞(注4)
2010	田毎の月(たごとのつき)	2010年度 JRC(日本ばら会国際新品種コンクール) 金賞
	ソーンレス GC ピンク	同上コンクール 銅賞
	アンゲリカ	第11回ぎふ国際ローズコンテスト 銅賞 Best FI賞(注5)

(注1) 世界バラ会連合賞：金2席に贈られる(該当なしの場合は銀1席に贈られる)

(注2) 勸日本ばら会賞：日本育種者の最高得点者へ贈られる

(注3) 国土交通大臣賞：金賞を受賞した品種のうち、最高得点を得た品種に贈られる

(注4) 長岡市長賞：一般来園者による人気投票1位の品種に贈られる

(注5) Best FI賞：フロリバンダ(FI)の最高得点者へ贈られる

くことになった‘ファミー’である。

‘ファミー’を最初に出品するときは大変迷った。自分では良いと思ってもどんな評価になるのかと心配しながら出品したが、客観的な評価が得られ、育種熱は

一層高まった。

日本では近年表2の3カ所でバラの新品種の国際コンクールを開催しているので、ここに出品し、評価が得られるのは幸いである。そして、各々のコンクール



「真宙(まそら)」 第31回越後丘陵公園「国際香りのばらコンクール」で金賞及び国土交通大臣賞を受賞



「ノースフレグランス」 第31回越後丘陵公園「国際香りのばらコンクール」で長岡市長賞を受賞

場所により、特徴のある配点がされているので、その品種の特徴を生かしてもらうこともできる。たとえば越後丘陵公園では香りを重視しているし、岐阜の花フェスタ記念公園では耐病性を重視している。

私のバラ育種の最終目標は花型や花の大きさ等は若干劣っても薬剤散布はほとんど無くとも一般家庭で秋まで咲き続けるバラと思っている。なお、できればつるバラ、修景用バラ（造園用）、グランドカバー用バラ等は刺の無いもの、さらに欲を云えば香りもほしいと思っている。

これらを併せ持った品種となると、私の育種ごときではどうにもならないが、「継続は力なり」で続けてみたいと思っている。

バラの育種を始めようと思った頃、もうすでにこんなに多くの品種が紹介されているので、もう手をかける余地はないのかなとも思ったが、いざ手をかけてみると、まだまだ欠けている谷間もたくさんある。

前述の‘ファミリー’のように、極小規模でも実用品種も生まれることがあるので、この歳（80歳）になっても止められない。時には神が導いてくれたのではないかと思うようなこともある。



「田毎の月(たごとのつき)」 2010年度 JRC(日本ばら会国際新品種コンクール)で金賞を受賞

是非若い人たちにはバラにも挑戦していただきたいものである。表3は目標の品種とはまだ遠いが、とりあえず受賞した品種の紹介である。

施設と露地を組み合わせた 効率的な鉢花生産をめざして

平野 修 司

経営について

私は、愛知県海部郡飛鳥村で鉢花生産をしています。飛鳥村は名古屋市の西に隣接する場所にあり、愛知県で数少ない「村」で、人口はおよそ4500人です。村の地形は全体が平坦で海拔平均がマイナス1.5m。海面より低い場所が多く、北部は水田作や野菜作が多く行なわれ、南部は工場や港湾施設が充実した臨海地帯が広がる二面性を持った地域です。また都市に近いことから、高速道路や国道があり、交通の便がとても良いところです。

生産施設の概要ですが、施設面積は温室が6棟あり約5000㎡、ビニルハウス1棟で約250㎡、露地が3600㎡です。労働人数は、事業主である父を中心に母、私、妻、祖父と家族5人、パート従業員を常時5人の合わせて10人で取り組んでいます(写真①)。生産品目は、春にはミニバラ、夏から秋にかけてはレウコフィルム、秋から冬にかけてエレモフィラとポインセチアで、この4品目を主体に生産しています。鉢サイズはバラが4、5、6号鉢、レウコフィルムとエレモフィラが3.5号ポツ

ト、ポインセチアが3号鉢で出荷。出荷先はおもに市場で、関東地方で4社、東海地方で4社、関西地方で3社とそれぞれ約20%、40%、40%の荷物量の内訳となっています。

わが家では、祖父が切花生産をしていましたが、昭和40年あたりから海部郡で鉢花生産が盛んになってきたこともあり、父が鉢花に切り替え、おもにポットマムの生産をしていました。当初約1200㎡の温室から始



写真② 外観風景



写真① 家族と従業員のみなさんで



写真③ 施設内のエプ&フロア給水装置 ミニバラ生育中

まり、バブル経済もあって規模を拡大してゆき、平成3年には3800㎡、平成12年には5000㎡と今の施設面積となりました(写真②)。平成13年頃には、施設内全体にエブ&フロー給水装置(写真③)を導入し、また平成18年には露地の3分の1にもエブ&フロー給水装置を設置しました。

自己紹介

高校卒業間近にこの園芸業界に進む決心がついた私は、園芸別科花組にお世話になることになり、2年間園芸についての勉強をさせていただきました。学生当初はただただ学生生活を楽しむだけの毎日で、授業でも実習でも言われたことをやっている感じでしたが、しだいに1000属検定に取り組んだり、自分が栽培してみたい植物を決めてその植物を実際に育て、さらに実験、考察をしたり。よりいっそう植物に携わるようになると、将来の自分のために今何をやらなくてはならないことなのかがはっきりと見えてきたことを思い出します。1000属検定では、いろいろな植物の名前や特徴を知る良い機会となり、植物の栽培ではまったく思い通りにいかず、どうすると植物の生長をコントロールし、丈夫で花がよりきれいな鉢花が栽培できるのかを勉強させてもらいました。

また勉強だけでなく、同じ道へ進もうとしている全国の仲間たちとの出会いによって数多くのかげがえのない時間を過ごすこともできました。

花組に在籍した2年間はとても充実した時間を過ごしていたと思います。この2年間の勉強こそ、今の自分の礎になったといっても過言ではありません。そして仲間たちとも今でも連絡をとりあい、年に一度は集まり、いろいろな情報交換をしています。

私が就農してから

就農当時、鉢花単価が急落傾向にあり、数量を多くすることで、売上金額の落ち込みを補っているのが現状でした。私が市場との取引を父から任されるようになり、自分で作った鉢花が思ったように値段がつかず、正直いって、初めはびっくりしたことを覚えています。なぜ売れないのか、どうやったら高く売れるのか。未だに答えを模索する毎日なのですが、この頃からいろいろと考えられるようになりました。そして、まず我が家のローテーションの把握をし、どんなことが特徴で、その特徴をどう生かして生産すれば良いかを常に考えるようにしました。

我が家の生産品目の1つであるミニバラは、エブ&

フロー給水装置によりかん水時間や労働の省力化から小鉢化し、3号ポットで出荷していました。3号ポットに挿し木をしてそのまま花を咲かせて出荷するというサイクルで、約3ヶ月での出荷でした。しかし、3号ポットの出荷では需要と供給のバランスが崩れていて、年々単価が安くなり売れ行きが悪くなりました。そこで、バラの特徴でもある休眠能力を利用して夏から冬にかけて露地で栽培し、鉢上げをして鉢サイズを大きくしました。また、開花日から逆算して施設内に入室することで、新鮮でボリュームに富んだミニバラの栽培方法に切り替えていきました。また開花時期も、3月や5月のイベントに合わせることで、注文数も増え、結果として価格も安定しました。

このことがきっかけで、我が家では「露地生産」に着目するようになりました。幸い、当初より複数所有していた土地があり、現存の施設を核とし、その周辺の土地との交換をしてもらったりしながら1箇所に集め、露地の拡大を図りました。このことで、ミニバラは生産数も増え、今では約5万鉢に生産数を伸ばしています。

また、露地面積の拡大により、いろいろな植物を生育初期以降露地で栽培し、直接露地から出荷ができるかどうかを試作するようになりました。初めにも書いたエレモフィラやレウコフィルムなどの植物は、夏場の施設内では温度や湿度が高すぎて徒長して倒れたり、根腐れを起こしたりと、うまく栽培することが出来ませんでした。ところが、露地で管理することで徒長することもなくなり、丈夫なしっかりした株を生産することができ、また露地にエブ&フロー給水装置を設置すること(写真④)によって、かん水の省力化も図るとともに、過湿から起こりやすい立ち枯れや根腐れが少なくなり、生産ロスの軽減にもつながりました。



写真④ 露地のエブ&フロー給水装置 エレモフィラ生育中



写真⑤ スプリンクラー装置 ミニバラに散水中

施設だけでなく、露地を使って時間を掛けてでも高品質な鉢花の栽培を心がけた結果、施設の有効活用も出来るようになっただけでなく、他の生産者との差別化ができるようになり、市場や消費者からも高い評価を得られるようになりました。

これらの植物を露地生産から出荷まで行なうことにより、施設内ではポインセチアの占有率を高めることができました。しかし、良いことばかりではなく、露地の半数以上の面積をホースで手動かん水をしなくてはならず、夏場の暑い時期にミニバラで露地を占めてしまう時期は、雨が降るとき以外は毎日かん水作業時間となり、施設内で栽培しているポインセチアを管理する時間と重なってしまい労働時間がかなり増えてしまいました。そのため、ポインセチアの生育中に見落としがどうしても起きてしまい、ロスにもつながってしまいました。

施設と露地の有効活用を目標として、どちらかが生産ロスをしては意味がありません。そこで、より良いポインセチアを生産するために、今年よりスプリンクラーの設置(写真⑤)を試みて、さらなるかん水の省力化を図りました。このことにより、現在は施設内の作業を中心とし効率も上がっています。

今後は

これまで、我が家の施設と露地の活用方法を書かせていただきましたが、現存の施設や露地を最大限に生かすために施設や機械などの充実を図り、手間をかけるところはかけ、省くことができるところは省いて生産をしてきました。今後はもっと時間の余裕をつくり、他の生産地の視察をする時間を作って、いろいろな植物に触れて見たいと思っています。そして、より多くの植物の性質や特徴をつかみ、新しい植物を生産品目

に取り入れられるよう勉強したいと思っています。先ほどにも書いたように、現在は4品目を中心に生産出荷をしています。品目数が少ないとコスト面の負担が少なく、より高品質な鉢花が生産可能だとは思いますが、これ以上1品目における生産数を増量しても需要と供給のバランスを崩すことにつながると思います。そして1品目が急に売れなくなった場合、1品目にかかるウェイトが大きく、大幅に売上がダウンする可能性も予想されます。そのため、今後は生産品目をもう2～3品目増やして生産に組み入れていきたいと思っています。

また、生産性の向上はもちろん、経営面においてもさらなる向上を目指さなければならないと思っています。5年ほど前からパソコンを使い、簿記とは別に出荷市場における品目別の売上金額の記録をとるようになりました。このことによって各市場の出荷量や売上金額、品目ごとの平均単価の把握ができ、各市場における出荷量の調整をし、価格安定を図ってきました。

さらに去年からは作業内容の記入、作業労働時間の記録、施設や露地の占有率等を入力し、資材等の経費を照らし合わせて、1鉢あたりの原価計算をしています。1鉢のコストを把握し、今後はより一層のコストダウンを目指しつつ、1鉢1鉢大切に生産をしていきたいと思っています。

また、販売についても市場との企画生産出荷、小売店とのコラボ企画、ネット販売業者との提携など、市場のセリ販売に偏らないようにさまざまな生産出荷体制をとるよう心がけています。まだまだ比率が少ないので、市場のセリ販売の比率をより少なくし、生産鉢の価格安定を目指しています。

最後に

この10年、家族が積み上げてきた事に、少なからず上乘せできるような一生懸命がんばってきました。また昨年結婚をし、家族のためにより一層仕事に対する思いが強くなりました。

花業界だけでなく、どの業界においても要らないものや無駄なものは買わないこの時代に、さまざまな人の意見を参考にして自分の生産する植物を購入していただけるように努力して行きたいと思っています。

また、自分を常に客観視し、冷静さを保ちながらも自分のやっていることを信じて、一步一步前に進んでいきたいと思っています。

デンファレ栽培 「ニッチから本流へ」

眞 鍋 哲

まず始めに、今年3月に起きた東日本大震災に被災された方々へ、お見舞い申し上げます。われわれ全国民一丸となり少しでも早い復興に向けて頑張っていきたいと思います。

現況

宮崎県宮崎市在住。宮崎空港から歩いて5分の所に住み、車で5分の所に農場をかまえる。現在33歳。妻と3歳になる男の子の3人家族。来年2月には2人目の子供が誕生予定。妻は今のところ別に仕事をしているため、手伝い程度の両親とパート2名の4~5人体制で、デンファレを中心とした洋ランを生産・出荷・販売している。デンファレは約40品種ほどを栽培しており、国内の生産者の中では多い方だろう。デンファレ以外ではオンシジュームのトゥインクルや、ミディ系の胡蝶蘭、イオノシジュームのはるり、エピソードラムなど少量多品目の生産をしている。生産規模20a。平成19年に国の制度資金を借り、経営を開始したが、経営的にはまだまだということが実情だ。当初予定していた5カ年計画に照らし合わせてみると、がっかりを通り越し、思わず笑いが出てしまうほど乖離した現状を打破すべく日々奮闘中である。

大学への道

あまり記憶には無いのだが、私の祖父は養鶏業を営んでいた。自分が物事を理解する年齢になる前に引退廃業していたため、自家用のチャボがいたことぐらいしか憶えていない。しかし、一般のサラリーマン家庭と比べれば、より身近に自然や生き物、農業が存在していた。そんな環境で育った自分は、当たり前のように虫を取って、草むらに基地を作り、食べられそうな実はとりあえず口に入れるという遊びの中で、自然への造詣を深めていった。

小学生のとき（確か2年生頃）、自分の中で将来につ

いてある決心をした。漠然とではあるが、自然に関係することで、常に子供と接する事ができる仕事をしようと。

その当時県職員であった父は、俗に言う中間管理職だったのだと思うが、忙しく仕事をしていて、あまり一緒に遊んでくれなかった気がする。この時に感じた思いが根底にあり、自営業の道を志す…。なんて安易なんだと今更ながらに思うのだが。

私は学校の勉強が大嫌いだった。何故勉強しないといけないのか(?)という質問をいつも大人にぶつけていた気がする。当然のように高校に行かなくていいとさえ思っていた。しかし高校進学時には、周囲の大人にそそのかされて全国で初めて出来た公立の中高一貫校の一期生として進学する。山奥にある学校で自然学習を売りにしていたため、あまり勉強しなくていいのだろうと甘く考えていたのだが、実際は自然学習もある進学校。しかも全国的にも注目を浴びていたため、一人でも多くの生徒を大学へ行かせようと教師も必死になっていた。内心卒業後は就職しようと思っていた自分も、説得を受ける形で入れそうな大学を探す事に。元々やる気の無い自分がそんないい成績をとっているはずも無く、純粋な学力だけでは無理だと諦めていたのだが、先生方の配慮もあり、自己推薦での大学受験という選択をする。結果、この園芸学部は何とかなろうじて入学できた。

大学時代

園芸学部に入りまず驚いたのが、同級生の中に就農や自然科学系の研究・就職などを目的としていない、とりあえず千葉大で入れそうな学部が園芸学部だけだったという理由で入学していた学生が多いことだった。彼らに将来やりたいことや夢を聞いても「まだ決まっていない。何がしたいのかこれから探す」という答えが圧倒的に多かった。自分の思い描いていた大学

像、園芸学部像との違いにどこかショックを覚えた。

かく言う自分も方向性として園芸学部を選んでいるだけで、この先自分が何をしなければいけないかが分からず、漫然と日々を過ごしていた。

3年進級時に研究室の選択という、分岐点を迎えた。花卉研の先輩たちの説明の中に、「花卉研に來ればただで南米に行けるよ」という甘い言葉に誘われて花卉研を選択することに。このときの選択が正しかったかどうかの答えはまだ出ていないのだが…。

花卉研での学生生活は、これまた自分の思い描いていた学生生活とは全く違うものだった。

よく先輩たちにも言われたものだが、まるで軍隊のようだった。

3年生の秋に甘い言葉が現実のものとなり、人生初海外がアルゼンチン・ブラジル1ヶ月というチャンスを受けた。安藤教授のフィールドワークのサポートとして同行したのだが、これまでの自分の常識が通用しない世界の中に身をおけたこの体験は、今でも自分の宝物である。まず、語学の大切さ。コミュニケーション能力、臨機応変さ、自信を持った行動、明確な行動目標、カルチャーショックを受け入れられる寛容さなど、全力で身をもって経験できた。

自分はこの時期から学外の友人が非常に増えて行った。自分の知らない分野の人とより積極的に関わることで、より多くの経験をすることが可能になること、常に発見や驚きがあること。このときに会った友人たちとは、宮崎に戻ってからも交流が続いている。

4年生時の学祭で、花卉研では例年通り花屋の模擬店舗をやったのだが、この仕入れの際に市場であった出会いが、人生の大きな分岐点になった。東京農大に通う同年の学生で、この時はまだ彼とそんなに深く関わっていく認識は無かった。ほんのご挨拶程度の会話しかしていなかったように思う。その彼とのエピソードは後ほど。

いろんな経験をさせてもらった大学の4年間であったが、実はそれだけでは終わらなかった。卒論の時期を目前に諸事情により留年決定。ここから休学することとなる。休学中に実家に戻り、農業研修に入る。この休学期間は実に3年にも及んだが、その後安藤教授の計らいで復学。実に7年半の時間をかけて無事卒業するに至った。この卒業に際しては、多くの関係者から本当に暖かい声を掛けて頂き、大変感謝している。

農業研修

休学中に始まった農業研修は、大変充実したものだった。

た。当時花卉研にいらっしゃった上田先生の計らいで、花卉研OBの生産者を紹介していただき、その方達の所属する生産団体の中でも優秀な生産者5軒をローテーションで研修して回るというものだった。1週間区切りで、5週間で一回りし、また最初の生産者のところに戻るという感じだった。

この研修のメリットは、より多くの生産品目の栽培方法を体験できる以外に、それぞれの方の経営方針や、より効率的な作業の仕方、雇用に対する考え方など、様々なことにおいて、5名の経営者なりの実践の仕方を間近で感じる事が出来たことだった。

デメリットとして、野菜苗・花苗などは出荷までの期間が短い物もあるため、定植作業をした後、5週間後にはすでに出荷されていて、また別の作業をすといったように、継続的な維持管理などが、勉強しづらい事だ。

1年間のローテーションでの研修を終え、5軒の中で生産規模、経営形態等が自分の目指す形により近い生産者を1軒選び、2年目からはそこで通年の研修をさせて頂いた。5軒ローテーション時のデメリットをカバーでき、実りある研修が出来た。

実はこの時、自分は草花・鉢物の生産者を志しており、まだ洋蘭の“よ”の字も頭には無かった。大学復学・卒業時も含めて3年ほどこういった研修をさせて頂いて、そろそろ自分の足で一人立ちして行こうかと思いい、就農準備を始めた。

就農に当たってやらなければならない事が、数多くあった。就農計画書の策定、農地・施設の確保、資金準備などなど。一からの起業がどれほどの時間と労力とお金と周りの協力が必要かを、このときに痛感させられた。

かなりの時間を掛け、鉢物生産を中心とした経営計画を作ったのだが、その当時の鉢苗物の価格の急激な落ち込みもあり、本当に儲かる経営には程遠い計画にしかならなかった。

この頃、鉢苗物を生産されている先輩方に新規就農しようとしている事を話すと、100%同じ答えが返ってきた。「やめとけ」と。それくらい、既存農家でもきつい現状だったのだと思う。実際に研修に行かせて頂いていた方達からも、「就職したほうがいいんじゃないの」と言われた。実際この時にはかなりの迷いと葛藤に苛まれていた。

そんな時、あの彼から連絡があった。大学4年生の時、市場で出会った彼だ。自分が宮崎にいることを覚えていてくれて、所用で宮崎に行くので会わないかと。彼



出荷準備の様子



贈答用寄せ植え

は熊本の洋ラン生産者の跡継ぎで、すでに実家で生産者の道を歩み始めていた。

学生時代のことや、現在のこと、そしてこれからどうしたいかなど、お互いの夢や目標を話さず、今自分が就農について悩んでいること打ち明けると、突然彼が言った。「洋ランを一緒に作って見ない?」。すごく衝撃的な言葉だった。

洋ランを生産する。今まで全く頭に無かったことだったが、彼の熱い思いや夢を聞いているうちに、チャレンジしてみようという気になった。ここからが慌しかったのだが、洋蘭の栽培技術を習得するために、彼の農場で住み込みで研修をさせてもらった。基本的な栽培技術や流通に関することなど、鉢苗物の生産とはまた違った経営スタイルであることを実感した。

その後彼の紹介で、アメリカの大規模洋ラン生産者アンディ・松井さんのところでさらに経営についての勉強をさせて頂いた。洋ラン生産が、自分が思っていた以上にグローバルなものであることを知ることが出来た。

ニッチから本流へ

日本に戻ってから急ピッチで就農計画を練り直し、ようやく国の制度資金を借り、無事に経営を開始することが出来た。このとき28歳。わずかな期待と大きな不安を抱いての出発だった。

苗や資材などの購入に関しては、熊本の生産者の方と同じルートを使わせていただくことが出来た。栽培に関しては、まだまだ分からないことが多かったが、電話やメールでその都度アドバイスを頂きながら何とか出荷可能な物を作れるようになっていった。当初は市場出荷が中心であったが、より価格の安定を図るため、直接販売などの市場外流通の割合を徐々に増やし、現在は金額ベースで45%程が市場外での販売になって来ている。

直接販売が増えるに連れて課題となってきたのが、生産品目数であった。定期的に購入してくださる顧客に対応すべく、いろいろな品種を作るようになった。これにはもうひとつの目的があり、宮崎の気候により合致した品種探しの側面もあった。数年を要したがよ



グラナ・スイート

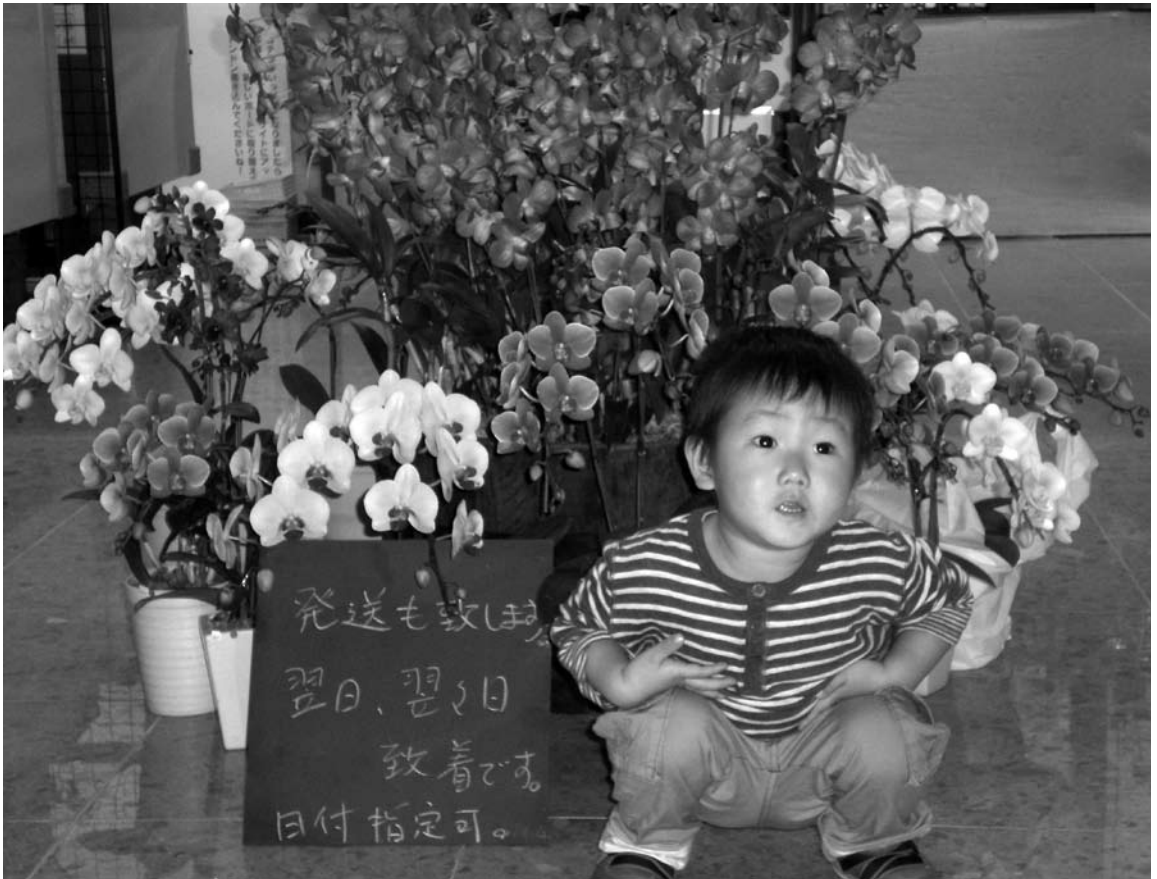
うやく今後作っていく品種や系統の選抜が出来たように思う。

販売をしていくうちに気づいた事だが、一般的にはまだまだ洋ランに対するイメージは『高級で、栽培が

難しい』という概念が根強く残っているように感じた。洋ランを買うお客様は、リピーターが主で新規顧客が増えにくい分野なのでは(?)、と感じることが多々あった。と言うことは今まで洋ランを買ったことが無い人たちが顧客として引き込むことが、今後の自分の経営にとっての最重要課題であると考え、新しい販売ルートの確立に着手した。空港での販売や各種イベントへの出店など、今まで洋ランを販売していなかった場所などに、積極的に参加して微力ながら新規需要の発掘をしている。

最後にタイトルの意味だが、新規就農した自分がこの分野で勝ち残るためのキーワードとして、常に自分が意識している言葉である。既存の先輩方が築いてきたレールに乗っているだけでは、先を行く人たちに追いつく事だけが目標になってしまう。自分なりの発想とチャレンジで新たなレールをすることで、追いつき追い越すことが可能になるのではないか。

まだまだもがき続けている自分だが、輝かしい未来を夢見て日々努力して行こうと改めて決意した。



宮崎空港での販売の様子と息子

鶴島久男先生を偲ぶ

花葉会の創立時から幹事だった鶴島久男先生は、昭和23年に千葉高等園芸専門学校を卒業され、東京都立農芸高校園芸科教師となりました。先生と松戸の花専攻生時代で親しかった魚躬昭一氏が農芸高校卒であった縁で、赴任されたのは21歳の時でした。当時戦後の荒廃した環境で食糧不足の時代に予算もない中、花の園芸教育に取り組まれたのです。担任されたクラスの生徒だった私は16歳でしたが、在学中からお世話になりその後もずっと先生は私の人生の師でありました。元旦から大晦日まで農場で頑張っておられたお姿は今でも目に浮かびます。園芸当番の生徒は始業前にフレームの菰をはずし、放課後は栽培管理をしていました。それらの作業で夜遅くなったとき、先生は近くの蕎麦屋に生徒を連れていくのが常でした。少ない給料の中からのポケットマネーだったと思います。まさに若き熱血教師でした。いまでも印象に残っている先生の言葉があります。

「私の花の授業の内容は穂坂八郎先生に負けない…」

今にして思うと経験の浅い若い先生がしっかり教材研究をしていたのでしょう。

「仕事に全力をかけているから俺は結婚しない…」

しかしこのセリフは数年後に変わります。近くの本屋で見かけた娘さんにひと目惚れし猛烈にアタックして、賦子夫人を得ることになります。

「今の俺は君の考えている鶴島とはちがうよ…」

これは20年前の言葉です。私には教師のツルさんのイメージですが、その後の試験場、種苗会社、花の評論や著作などの活躍を考えると大きく発展して行ったことなのでしょう。

先生は高校教師（昭和23年～33年）、静岡県伊豆有用植物園（33年～36年）、東京都農業試験場（36年～

59年）、㈱ミヨシ専務取締役農場長を歴任し、その後、テクノホルテイ園芸専門学校客員教授の傍ら園芸評論や花の著作などで活躍されていました。しかし昨年秋から体調不良を気にされるようになり、12月に肺癌と診断され、普段丈夫だった先生には大変なショックであったと思います。無気力になり誰にも会いたくないとのお手紙を受け取りました。その後急速に病状が悪化し痛みの緩和治療も効果ないまま残念な結果となりました。3月10日夜、病院に伺ったときは大出血があって切迫した雰囲気でしたが、少し落ち着いたとのことでお会いすることができました。間近な死を意識しておられる先生から小さな声で有難うと言われ、思わず手を握り締め万感の思いで最後のお別れをしました。翌11日には東日本大震災があり直後の13日に不帰の客とられました。享年83歳でした。

先生は雑誌「農耕と園芸」にライフワークとして100回の予定で「花の文化」を連載中でしたが、残念ながら68回で中断となりました。どなたか御遺志を継いで完成できればと願っております。

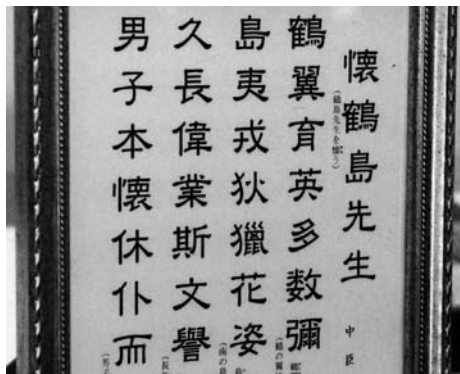
奥様からの気持ちを受けて「鶴島久男先生を偲ぶ会」を私たち教え子を中心になって5月29日に開催しました。農芸高校、ミヨシ、花葉会、試験場、出版界、生産者その他で270名の会になりました。教え子の多くは都内からでしたが、遠く南米アルゼンチンからは玉置昭雄氏が、さらに九州や東北からの参加もありました。会場にはドイツの元園芸学会会長からのメッセージや鶴島先生を懐かしむ漢詩が寄せられて、先生のスケールの大きな存在を改めて実感させられました。

慎んで先生の御冥福をお祈り申し上げます。

野田卯一郎 拝（昭和30年卒）



偲ぶ会会場に飾られた遺影



氏を懐かしむ漢詩

在りし日の故・笠原貞男君を偲んで

学友の一人、花の同業者の一員として81歳の他界は早すぎたと惜しめます。「人生僅か50歳」時代の吾々で、しかも兵役（昭和5年生まれ）もなく、現代の医学からすると90歳前後までは匠の技術者として業界・後輩のご意見番として余生を過ごしてもらいたかったと悔やんでおります。

私と故・笠原君の関係は、昭和24年学生制度変更により千葉農業専門学校（3年制）が千葉大学園芸学部（4年制）となり、専門学校2年生に欠員ができ、私は編入生として高知農業高等学校より入学したことに始まります。3年生になり専攻科選定を花卉とし、故・穂坂教授の下で花卉専攻の故人との関係が生まれました。6名の専攻生の中で、社会人となってからですが、千葉大花関係者の会『花葉会』では「岩佐吉純、笠原貞男、和田大」は「花葉会の3人組」と云われたこともありました。3人組（岩佐はタネ屋、笠原は切花屋、和田は花の造園屋）と、花に関するタネ・切花・花壇苗、花卉業界のすべてを3人で歩んでいるとのことと解釈しておりました。

現役時代の故人は、皆様ご存知の通り、「身長1.7m前後の風格・口髭・鏡の頭」は世間に対して「押しの利く」風貌そのものでした。学生時代は光沢ある黒髪で口髭無しの好青年でした。

最終学年3年のとき、アルバイトに行かないかと誘われて進駐軍将校の家（下高井戸と記憶）の庭手入れに週4回通いました。私にはできなかった片言会話で、満足していただいた仕事を完了。有難かった半面、心臓の強い人だなーと、感心いたしました。何にでも向かっていく彼には敬意を覚えました。

渋谷にフローラルアートスクールを設立し、時代の波に乗り、渋谷を基点として東京はもちろんのこと、日本各地に招かれて飛び回っており、毎年行われている昭和26年卒のクラス会にも欠席がほとんどでした。年月は忘れましたが、歳早々の「藍綬褒章」の受賞、

母校千葉大学園芸学部の非常勤講師、埼玉テクノホルティ専門学校講師など、華々しい業績と数えきれないフラワーデザイナーを育成しております。物怖じしない性格、物事の早取、着実に実行する性格は学生時代から持ちあわせておりました。

切花界・デザイン界での大変化は「宿根カスミソウの出現」で、装飾技術の一般化（ソロバンと電卓の差）の対応を尋ねると、即座に「一輪で効果を倍増させる品種、例えばヒマワリやアンズリウムの色変わり」などの答えでした。カスミソウを活かす手法？ カスミソウを利用する手法？ など、私ではその路ではないので不明ですが…。

現役終盤に日本フラワーデザイナー協会の会長を任されましたが、技術屋・匠の職人と申しますか、弱い経理・経営の面で不覚の落とし穴に追い込まれ、大変な個人的責任を取らされ、業界のすべての業務から手を退きましたが、本当に気の毒でした。

その後、体調を崩し、大施術・入退院を繰り返したようです。平成20年10月の千葉県外房州のクラス会には何年振りかで顔を出してくれました。

吾々俗世で「賢人・善人は早々に逝き、残るは凡人・悪人ばかり」と云われており、私もその一人かと歳なりの日々を『払いすぎた年金を貰い切るまで』と、歳なりに頑張っております。

平成22年10月16日、奥様より3日前に癌で入院したとのことで、柏の病院に見舞いに行きましたところ、本人は元気で、癌ではなく腰の骨のようでありハビリOKとのこと、明日退院とのことで安心していました。23年3月早々に電話をしたら、奥様から「また入院」とのこと。一両日中に見舞いと予定を探していたところ、運悪く3月11日の東日本大震災のため交通機関の問題があり、直ぐには行けず延び延びとなっております。5月、ご子息から死亡の連絡をいただき驚きました。「今生のお別れ」をしたかったと後悔しました。

5月14日のお通夜には出席しましたが、15日の朝9時からの葬儀には静岡県・小山町からの交通機関が間に合わず失礼いたしました。

天国でゆっくりと自由に花を楽しんでくださいと祈りながら、筆を置かせて頂きます。

和田 大 拝（千葉大学園芸学部花卉専攻 昭和26年卒）



3人組の一人、故・岩佐氏の花華人生50年祝賀会の会場を匠の技を発揮して装飾した笠原氏の装飾作品（1999年10月16日 ホテルオークラ）㊤とその日の笠原氏㊦

花のふるさとメキシコを訪ねて

小 泉 力

私達の生活の中でメキシコ原産の植物から多くの恵を受けている。例えばトウモロコシ、サツマイモ、カボチャ等の食物、花ではダリア、コスモス、ジニアほかのキク科植物、ポインセチア、サボテン等の多くを数える。メキシコの旅は花の原産地が見られる絶好の機会であった。

今回は2010年9月22日から29日まで8日間の旅である。参加者は日本から鈴木団長以下17名、アメリカから石原三郎氏（33年卒）と現地メキシコから加藤直之氏（35年卒）が加わり19名となった。旅行社は日本旅行で添乗員は鈴木伸章氏が同行した。

9月22日（水）

空路メキシコへ

成田空港をアロエメヒコ航空（AM）にて一路メキシコシティに向けて離陸、所要時間約13時間の長旅ではあったが無事到着した。

無事通関、メキシコ在留35年の経歴を持つ現地ガイド川原さんが出迎えてくれた。

9月23日（木）

カセドラル大聖堂

午前はメキシコ市内の大学都市であるメキシコ国立自治大学（UNAM）の植物園見学に向かう。早朝、市中心街にあるカセドラル大聖堂の広場に寄る。今日



ダリア・コッキネア

は大規模なデモがある予定だと市内に警官が出動していて物々しい。広場は大聖堂や政府機関の郵政省、元国会議事堂の大蔵省、メキシコ銀行などに囲まれている。9時から始まるミサの鐘が鳴る中で、メキシコの解説を聞く。

大学都市植物園

入り口ゲートを入ると早速、ダリア・コッキネアの野生種が周辺の草叢に咲いていた。色は赤色からオレンジまでであった。チグリジアが美しく咲き、印象深い。足元には小型の白いビデンスとマリーゴールドの小型種が雑草状に咲く。珍しいピンクのベゴニアが目された。サボテンや多肉植物のコレクションが園内の大面積を占める。多肉植物は竜舌蘭、柱サボテン、ウチワサボテン、ユッカなどが植えられ、年数を経て巨大かつ長大になり、メキシコらしいエキゾチックな景観を呈していた。

園内は花木、宿根草等、多数の植物が庭園風に植え込まれており、それぞれに学名や原産地が記入されたラベルが付いていた。Native Mexico と書かれたものが見られた。

午後から XOCHIMILCO 観光 水郷地帯の花市場へ

船に乗っての水郷めぐりである。バンドの船が近寄り、1曲歌ってもらって何がしのお金を貰う陽気なメキシコ人の流しである。このあたりは花の栽培や小売市場があって、船に乗って花屋に寄り、鉢花や観葉植物を買い求める客で商売になるらしい。

花屋に上陸する。ビニールハウスの中には、カラフルな球根ベゴニア、グロキシニア、ペチュニア、シクラメン、ユリ、コリウス、スプレーギク、アザレア、ブルーファンフラワー、ニューギニア・インパチエンス、ハボタン、ゼラニウム、マリーゴールド、パンジー、四季咲きベゴニア、木立ベゴニア、マツバボタン、ワスレナグサ、キンセンカ、ガザニア、ケイトウ、トウガラシ、大鉢に植えたバラ、巨大輪ダリア、ブーゲンビレア、ハイビスカス、観葉植物、コニファー、盆栽



日本メキシコ学院にて 前列中央加藤直之理事長

など多種多様な花卉が並べられていた。

9月下旬に春と夏秋の草花が同居しているのは、高冷地で涼しい気候のためであろうか。

日本メキシコ学院

加藤直之君の案内で彼が理事長を務めている日本メキシコ学院を視察した。この学校は幼稚園から小・中・高校まである。初めは日系の子弟のための教育機関であったが、現在はメキシコのエリート校としてメキシコ要人の子弟も通学しているとのことである。日系人や日系企業の寄付と日本政府の田中角栄首相当時の援助もあって設立され、33年を経過してメキシコの一流校になっているという。ここでは既に忘れられた古き良き日本の伝統がまだ生きていた。その教育方針や日系人の努力を想い、感激した。

日墨会館視察と夕食会、加藤君の茶庭

この協会の日本庭園の一隅に茶室がある。これは日本人移住90周年を記念して作られた裏千家寄贈のもので加藤君が作った茶庭もある。彼は園芸学部茶道部で吉江修司先生の奥様からお茶を習ったことから聞いたが、遠くメキシコの地で花開いた。

日墨会館では2世の松本氏(Ing. Jose Ernesto MATSUMOTO)らの歓迎を受けた。花葉会一行のために海苔巻寿司、天ぷら、赤飯などの日本料理を用意していただいた。日本人会がメキシコの発展に果たした役割の一端をお聞きし感激。

9月24日(金)

ダリア原種群生地

市内から2時間ほど走った場所にあるダリア原種群

生地に向かう。ここは川原ガイドさんが見つけた場所である。車からピンクのコスモスの群生地が見える。ここでのコスモスは畑の雑草で耕作を放棄するとたちまちコスモス畑になってしまうらしい。この風景はコスモスだけでなく、キク科の全面真黄色になった畑やトウモロコシ畑の雑草としても多く見られた。

目的地は現地住民にあらかじめ川原さんが話をつけておいた場所である。ここも耕作放棄地の様相で、コスモスとキク科植物の大小が優先していたが、すぐ脇の林の植叢は多様な植物が見られた。

サルビア・メキシカーナ、ノコギリソウ、フジバカマに似たもの、マリーゴールド似の草丈の長いもの、ビデンスのウインターコスモス、真っ赤やオレンジ色のダリア・コッキネアがウチワサボテンの間に咲いていたが盛りは過ぎていた。黄色のユリ科カロコタスの可憐な花が目をついた。赤のペンステムン、青色のツユクサは日本のものと色は同じだが厚い葉であった。雑草畑と化していたがわい性のビデンスの白、マリーゴールドの黄に混じって咲くピンクのコスモスの風景はワイルドフラワーとして見ても美しかった。全面黄色に覆われた畑が多く、高さ2mのヒマワリに似たタイプであった。

ウチワサボテン栽培農場

次の視察地は広大なウチワサボテンの生産農場であった。果実や若い葉を食用にしている。昨夜のディナーで葉のステーキを食べた。ここではウインターコスモスが雑草化していた。

テオティワカン遺跡

サボテン農場の隣接地にメキシコを代表するテオティワカン遺跡があり、短い時間だが見学した。壮大なメキシコ文明がこの地に栄えていた時代を思う。ここでは地面に張りついているようにして咲いている極くわい性のサンビタリアが目立った。日本ではこのような極くわい性にはならないのは気候のせいだろうか。

またこのような草姿は他の遺跡でも同様に見られていた。

国立人類学博物館

夕方になってこの博物館に到着した。巨大な石像や怪奇な彫刻に異文化の一端に触れる。優れたメキシコの文化の歴史をみて感動。夕闇迫る頃にホテルに向かい、夕食後に加藤君と別れた。

9月25日(土)

メキシコシティからプエブラを經由してオアハカへ

日の出前にホテルを発ち、オアハカに向かう。平坦な畑地を過ぎて山岳地帯に入るとメキシコの松の樹林帯に入る。峠を越えてまた平地が開けると遠く山並みが見えて、右手には富士山そっくりのポボカテペトル山が雪をかぶって美しい山容を見せてきた。このあたりの畑は主にトモロコシ栽培だが、耕作放棄地は大抵キク科の大形の黄色い花の雑草である。

チョルーラ遺跡見学

9時30分頃、プエブラのチョルーラ遺跡に着いた。平原の中に小山があり、その上に明るいオレンジエローのレメディオス聖母教会が建っている。快晴の青空に映えて美しい。この教会はスペインが建てたものだが、実はこの山のように見える場所はスペインに滅ぼされた遺跡だというのが、到底信じられない大きさの山である。汗をかきながら頂上を目指す。途中で楽器を鳴らしバラの花びらを撒きながら登って来る行列に出逢う。結婚式らしい。陽気な国民性である。

頂上の眺望は360度で吹く風も爽やかで皆見とれてしまう。

ここでの植物探索では、ダリア・コッキネアの良い株があったが、そのほかはこれまでとあまり変わらない種類であった。珍しい植物ではマメ科でエリスリナに似た花形で黄緑色の目立つ低木があった。帰国後調べたらアフリカ産のクロタラリア・アガティフローラであった。

山岳地帯を越えてオアハカに向かう。途中、どこまでも続く山肌に柱サボテンが林立していた。

サボテンの自生地

途中でバスを止めて(AGUAという地点)サボテン自生地に踏み入る。ここのサボテンはイメージと違い、砂漠ではなく乾燥地だが、ジニアなどの一年草や灌木の中に生育していた。ここでもジニアの原種を見たが、園芸種のようなカラフルさはなく、くすんだ赤、オレンジ、黄色がいかにも原種らしい色合いで、葉や草丈は小さい。

オアハカに夕方到着

宿泊地のカミノ・レアル・オアハカホテルは市街地にあり、元修道院の瀟洒な建物である。中庭の植物の植え込みはセンス良く、二階の回廊を囲むブーゲンビレアの花が美しかった。ホテルの広間では、結婚披



柱サボテン自生地



ジニアの野生種。サンビタリアも混生

露宴があつて大音響で紳士淑女が夜半まで踊り狂っているのは壮観で、さすがラテンアメリカの国だと思った。ここは観光地で夜の町は賑やかで露店も並び、珍しいメキシコ土産選びに時を過ごした。

9月26日(日)

ランの植物園

朝から小雨の降る中、ランの植物園を目指す。町から遠く離れた山中に住み、メキシコのランを収集している学者がいるという。入口にはランの絵の案内板があるが、ラン園という華やかな雰囲気ではない。入って見ると野生植物を収集し、溪谷に沿った森林の中に植えたり木にぶらさげたりしている。収集した植物はラン科以外にも観葉性のペゴニア類、アナナス類のコレクション等多数あり、自然の生態園である。ランは開花期でなかったため一部が咲いていたが地味なものが多かった。宿根性のヒマワリと言われる花が咲いて

いて珍しかった。

ラン園を辞して、メキシコ植物探索の最後の秘境を目指して雨の降る中を奥地に向かった。待望のダリア・ピンナタの原種を道路脇の崖の上に発見。皆興奮してシャッターを切ったが、雨降りの中で余りクリアな写真が撮れなかったのが残念。ペンステムンなど花の種類は多かったが雨が激しくなり早々に引き揚げた。

帰途、途中で原住民の集落を訪れた。傾斜の深い山中に数軒が見える。ガイドの川原さんの顔で訪問を受け入れてもらったが、カメラを向けてはいけないとの注意があった。空き缶などにダリアの園芸種を植えていたが、見慣れている野生種は雑草扱いで余り関心がないらしい。傾斜地にアガパンサス等の花が植えてある。バスの便があるので、町に出荷しているとのことだった。

巨大杉を見る

町に戻り、サンタマリア・デ・トゥーレの巨大杉（メキシコヌマスギ）を見学、樹齢2000年超、根元幹周58mで、ギネスで世界一の巨木と認定されているという。



サンタマリア・デ・トゥーレの巨大杉

午後、サボテカ族聖地ミトラ遺跡

ここでもサンビタリアなどキク科の植物が目立ったが、小型のチランジアの着生やそのまま園芸化できそうな黄色のフリーシアがあった。

9月27日（月）～28（火）

オアハカからメキシコシティに戻り、帰国の途に着く。

モンテアルバン遺跡

朝早く出発して最初にモンテアルバン遺跡を見学。オアハカ地方で有名な遺跡である。今朝も雨の中での見学となった。壮大な石積みの遺跡の中に人間の様々な彫刻があり、征服者が行なった解剖などの気味の悪い彫刻もあるが興味深い。博物館もあり、遺跡ファンには必見の場所の一つである。植物はこれまでの遺跡と共通なサンビタリアなどキク科が目立っていた。

帰国へ

見学後、メキシコ市に同じ道に戻り、空港に向かう。お世話になった川原ガイドさんと別れて機乗、夜半23:50メキシコ空港を立ち、ティファナ空港で給油、翌28日2:55発にて成田に向かう。

9月29日（水）

早朝6:45無事に成田空港に到着した。

旅行を終えて

今回のメキシコの旅では幾つかの大きな収穫があった。一つは中米というこれまで足を踏み入れなかった植物遺伝資源の宝庫を訪れることができた。帰国後改めてメキシコの植物を見ると、いかに多くの農作物や花卉がここから世界に伝播したかを知った。この有用植物群は現地住民に見出されて、その文化と共に発展してきた。アステカやマヤの文化が人類の食文化や花卉園芸にも果たした恩恵は計り知れないものがあると感じた。

二つ目は花業会会員である加藤直之君と再会したことである。彼は園芸学科昭和35年卒の同級生であり、卒業後間もなくメキシコに渡った。詳しいことは省くが、彼の地で造園業を営むと同時に、日本人メキシコ移住者のリーダーの一人として尽くしてきた。現在は日墨学院の理事長の要職にあり、日本とメキシコの親善に尽くしている。花業会の会員の中にはこの他にもあらゆる分野で活躍されている方が居られると思いに思う。

最後に、このツアーが実り多い成果が得られたのは、ひとえに現地ガイドを務めてくださった川原氏(Hitoshi Kawahara)に負うところが大きい。日本人であるがメキシコに帰化し、メキシコの文化、歴史、政治にも詳しく、加えて植物、生物好きで、自らメキシコの奥地を探索しておられたので、まさにこの植物探索の旅に相応しい名ガイドであった。川原氏にお礼を申し上げたい。



終わりの始まり

千葉大学園芸学部園芸学科 花卉園芸学研究室 4年

池田 佳織

花卉研 年間スケジュール

昨年の10月、後期の授業開始とともに私たちの花卉研生活が始まりました。最初の1ヶ月は戸定祭で開く花屋さんの準備。お店に並ぶ色とりどりの植物の一部は、自分たちで栽培します。経験の無い私たちは、灌水やハウスの換気の仕方、草刈り鎌の研ぎ方から先輩方に教わりました。お客さんの質問にしどろもどろになりながらも、戸定祭での成功を経て、ようやく花卉研に馴染めたように感じました。

そして秋の種子採り。ここ数年、年に3回ほど行われている種子採りは、関東周辺で採取した様々な植物の種子を、精製、乾燥、袋詰めして、海外の大学や植物園に郵送するというものです。ゼミ旅行気分で行くのかと思いきや、車が停まるのはカエデやウツギの種子が採れる山中。紅葉にも少し早い季節でしたが、地域特有の植物を目にしたり、車中で先輩方の研究や日々の生活の話などを聞いたり、よりいっそう花卉研の一員らしくなれました。そしてまた先生や先輩方の植物の知識の豊富さに驚かされました。

年末には各人の研究テーマも決まり、ここから本当の花卉研生活に入ります。一人ハウス一棟の管理を任せられ、毎朝の灌水や除草、播種、施肥、薬剤散布など、自分の研究する植物は自分で栽培するのが長年変わらない花卉研の基本です。年が明け、先輩方の卒論、修論発表会での姿に来年の自分を重ね、これからの指標を得ると同時に身の引き締まる思いでした。

3月の大震災では、幸いなことに大きな被害はありませんでしたが、この影響で大学全体の卒業式や花葉会のサマーセミナーが中止になってしまったことは残念としか言いようがありません。春頃からそれぞれの実験も本格的に始動し、DNAや色素を調べる機械を順番待ちすることもあります。合間に、花産業必修1000属検定の勉強をしたり、大学生らしくバーベキューや小

旅行、花火などをしたりと充実した日々を送っています。

花卉研の視点

年中、植物に触れていると、通学時にも外出時にもついつい花卉研の視点で周囲を見渡している自分がいます。その花屋さんのディスプレイは工夫してあるなどか、この花壇は水不足だなどか、このシステムは花に応用できないのだろうかとか。卒業後、花産業に携わる人が多い花卉研は、将来のため、知識や技術の基礎を学び考えることができる最高の場だと感じます。残り少しの学生生活を、大切に、有意義に過ごそうと思います。

終わりの始まり

「フィールドからDNAまで」を合言葉に、これまで花卉研を引っ張って来てくださった安藤敏夫教授が、今年度を以て退官されます。1980年から花卉研の先生として数多くの学生を世に送り出し、1997年からは花葉会の会長も務められています。学生時代も含めると30余年も花卉研とともに歩んでこられたことになりませんが、その間、数々の書物や論文を執筆し、花業界の権威として尊敬を集めてきました。近年の花卉研の発展は安藤先生の教えの賜物と言っても過言ではないでしょう。そんな安藤先生の退官は長い花卉研の歴史の中で大きな節目になるのかもしれませんが。

最近、花卉研の卒業生にお話を聞かせていただく機会がありました。あまり覚えていないよと言いつつも、南米調査や原種ハウスの思い出や、先生や同期の方々の武勇伝を楽しそうに話してくださいました。数年前に研究棟の建て替えもあり、実験の環境や学生の雰囲気、研究対象など、変わってしまったことはきっと多いのでしょう。けれど植物に対する熱意や花卉研の一体感は、失われることなく受け継がれてゆくものなのだと思います。

圃場で汗を流し、実験に頭を悩ませ、あっという間の一年が過ぎて、今年も花卉研に新しい風がやってきました。先生方、先輩方から教わったことに自分自身が学びとったことを載せて後輩たちに伝えてゆけたらと思います。



植物と向き合って

園芸別科 花卉専攻 2年

半田麻衣子

明日は何をして遊ぼうか。そう考えながら毎日を過ごしていた高校時代が懐かしい。身近に生えている植物なんて目も留めず生活していた私ですが、今では植物について、「花組」について考えない日は無いくらいです。家の周りを歩いても、あれは何の花だろう？あの木にはどんな花が咲くのだろうか？と、日々疑問を頭にいだき、学校へ行く道を歩けば今日の実習は何をするのだろうか？と考えを巡らせる日々です。

園芸別科花卉専攻こと花組では、植物の栽培技術や基礎知識を習得するべく環境健康フィールドセンターで週2回、松戸キャンパスで週1回、計週3回の実習の他、夏休み、冬休みに実習を行っています。実習は毎回作業メニューが違い、土作りや播種、鉢上げ、ピンチ、出荷作業、出荷用のダンボールも作ります。農業高校を卒業した私ですが、出荷用のダンボールまで作るなんて初めての体験。ただ組み立てるだけなんて思っていた作業でも意外に重労働。汗をかきながら、時にはお互いを励ましながらい目標の数を終わらせます。

「今日の実習は、鉢上げです。」そう言われれば、鉢上げには何が必要なのか、トレイの数はいくつ必要なのかを皆で考えます。また、作業が始まればどうやったら作業が早く効率的に進むのかを考え、時には意見を言い合いながら渡辺先生や技官さん達から指導を頂き実習を行っています。今でも戸惑うこともありますが、少しずつ花組の息を合わせて作業できるようになったと思います。



花組の仲間と（前列中央が筆者）

松戸キャンパスでは、3つのハウスの管理作業などを行っています。土作りからハウスの内張りの張替え、除草、灌水などを行います。特に入学してすぐに覚えたのは、灌水の作業です。花組では、当番を決め交代しながら灌水を行っています。気温や土の湿り具合、植物の様子を見ながら水をやります。ハウスが暑くなる前に学校に来て花に水をやる。パイナップル科は、真上からも水をやり、サボテンや多肉植物は、週に1回程度水をやる。先輩から教えられたことを実践します。夏になれば、気温とともに上がるハウス内の温度を下げるため、側窓や天窓を開け、台風が来ればハウス内に風や雨が入らないよう急いで側窓や天窓を下げます。日々変わる気候に臨機応変に対応していかなければいけません。簡単そうで、難しい作業です。

また、水をやりながら植物を観察します。1000属検定合格のためです。属名、科名、代表種名と一緒に植物を覚えるため、植物の特徴を探します。花組の1000属検定の目標は、C級合格です。C級の合格者はB級を。B級の合格者はA級を。各自目標をもって取り組んでいます。今まで花の名前を気にもしていなかった私ですが、友達と道を歩き植物を見ればあれは何の花？と、問題を出し合うことも。頭を抱え込むことが少なくなるよう努力が必要。植物について覚えることは山のようにあり、もっと勉強しなければいけないと焦る気持ちで落ち着かないこともあります。

時間はあっという間に過ぎていきます。実習や1000属検定をこなしていく間にも秋になります。秋といえば戸定祭です。いろんな方の力を借りて、戸定祭成功のため今年も奮闘します。自分たちで考えて行動に移さなければいけないことも次々でできます。花選びから販売まで、花組に入らなければ出来なかった体験です。植物を通じて将来役に立つことを学んでいます。実習を通して先を考えるということ、そして人への思いやり、他にも沢山ありますが、いろんなことを学びながら花のプロを目指すため私はいつも植物と向き合っています。

モンゴル草原の旅

田中桃三

2011年、今年の花葉会の海外調査会はモンゴルへ行くことになった。

われわれ花葉会は、いままでヨーロッパ、オセアニア各地などをまわってきた。だが、ヨーロッパと日本の中間地帯にあるモンゴルについては、これまであまり情報がなく、分からない面も多かったが、探索に行くことにした。

7月13日

首都ウランバートルへ

成田を出発し、首都ウランバートルに直行した。韓国、中国北部を、文字通り直行し、5時間ほどで着陸した。

町の中心部はビルもあり活気を感じたが、少し道を走ると路面は傷み放題で、街路樹などの手入れも行き届いていなかった。そのため市内の道路の渋滞は日常化している。モンゴルの日常語はモンゴル語とハルハ語であるが、文字はキリル文字（ロシア）をつかい、看板などにもキリル文字で書かれていることが多い。

国土は150万平方キロと広いが、人口は270万人と極めて少ない。中国とロシアに挟まれ、国土の4分の1はゴビ砂漠で、乾燥地帯ではあるが、北部地帯は夏は降雨もあり、数多くの湖水があり、森林地帯もある。

初日は到着が午後6時と遅かったので、そのまま市内中心部にあるジンギスカンホテルに宿泊した。

7月14日

ホルジト

翌日、われわれ一行18人は、50人乗りの大型バスに乗り、東へ300キロほど離れた「ホルジト」へ向かった。

道は郊外へ出るとまもなく舗装が壊れ、やがて舗装もなくなり、特に幹線を離れるともものすごい荒れ道になり、時速10～20キロぐらいの速さでしか走れない状態になった。途中はなだらかな丘陵地帯で、草丈の短い草原が発達していた。草原には、ところどころゲル（大型のテント）が点在し、ヒツジ、ウシ、ヤギなどの放牧が行なわれていた。ゲルは1軒の場合もあり、2～3軒まとまっているところもあった。多くは電気

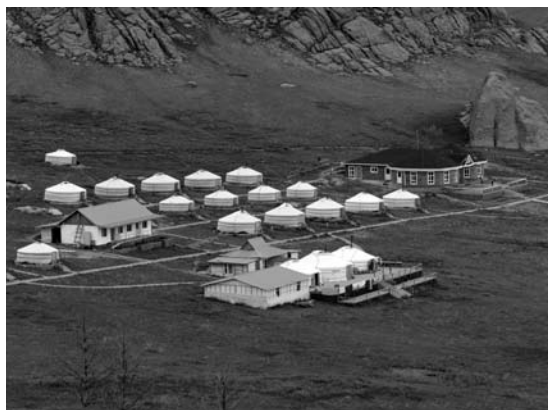
が引いてあり、自動車がとまっているゲルもあった。

ヒツジは白、黒、茶など、結構カラフルで、元気に走り回っていた。ウシは乳牛と思われるが、やはりいろいろな色の牛がのんびりしていた。あとは少数の馬とラクダと犬がバスからみられた動物のすべてであった。土は礫混じりの粘土質で、排水は悪く、少しの雨でもぬかるみになるとおもわれた。

悪路のなか、夕方になって、目的地のホルジトにいたが、周りに花は全く無いのである。当初の説明では一面の花畑で、そこで3泊して花の探索をするつもりであったのにである。その上宿泊所であるツーリストキャンプがひどい状態で、シャワーは壊れており、トイレも明かりがつかない状態であった。



ヒツジ、ヤギの放牧の風景



ツーリストキャンプの情景

ガイドさんに理由を聞くと、今年は春に降雨が少なく、例年花畑になる場所に全然花が咲かず。そのことの連絡が無かったとのことであった。

しかしここで3泊もするわけにいかないのです、翌朝またガタガタ道をウランバートルに引き返した。

7月16日

バヤンゴル

翌日はガイドさんと、モンゴルの植物専門の大学の先生の案内で北へ向かい、80キロほど離れているバヤンゴル付近まで行った。

道の横には川が流れており、道の両側の土手にカンパヌラ、リナリヤ、キスゲ、スターチス、イトハユリなどが咲いており、ようやくいままでの疲れを一気にいやすことができた。またこの付近まで北上すると樹林帯もあらわれ、針葉樹に混じって白樺なども見ることができた。

7月17日

テレルジにて

その後、一度ウランバートルへ戻り、予定より一日早くテレルジに向かった。相変わらず道路は悪くのろのろ運転であったが、夕刻に無事に着くことができた。

テレルジはヘンテイ山脈の南端に位置し、上部は岩山で奇妙な形の岩が多く、この一帯は国立公園として保護されている。

モンゴルの7月はいい気候で、昼間は日光が強く暑いが、湿度が無いのでしのぎやすい。夜は15度ぐらいまで下がったが、暖房を入れるほどではなかった。雨にも何回か降られたが長く続くことは無く、両具もほ

とんど使わなかった。

テレルジの宿泊所もツーリストキャンプだが、ホルジトより整備されており、快適な夜を過ごすことが出来た。キャンプはやはり30棟ほどのゲルと事務棟（フロント）、食堂棟、トイレ、シャワー棟などにわかれており、1棟のゲルに4つのベッドがあり、真ん中にはストーブがあった。夜はハダカ電球が一つだけであるだけであった。キャンプの立地は丘の斜面の下部にひろがっており、ゲルの間はコンクリートの道であり、側溝も掘られているので雨で浸水することは無かったが、雨漏りはあった。

キャンプの敷地の中や付近には、エーデルワイス、ナデシコ、ルリタマアザミなどがあちこちに咲いており、あたかも花畑の中でキャンプをしているような気持ちであった。

草原のところどころに穴があり、ザリスが住んでいる。時々立ち上がり、まわりを警戒して走りまわっていた。彼らはゲルのそばや通路にも姿をみせていた。そして上空には、小型のタカなどが彼らを狙って遊泳していた。

翌日はガイドさんと先生の案内で付近を探索した。ただし先生は日本語はもちろん、英語も喋れないので、ガイドさんを通じての会話はもどかしいかぎりであった。そこで知りたい植物があると、その脇に先生に学名をかいたラベルをおいてもらい、名前を覚えてもらうことにした。

この地の標高は約1000mであるが、日本中部山岳の標高1500～2000mぐらいのところの植物相と似ている。キャンプ地のまわりでは、ペロニカの紫、エーデルワイスの白、アズマギクのピンク、デルフィニュームの濃い紫、その他の花が一面に広がっている。ガイドさんの話では、ここはオキナグサの群生地だが、開



Leontopodium ochroleucum
(エーデルワイスの仲間)



Delphinium cheilantheum



Limonium sinuatum



Dianthus versicolor

花期は6月初めとのことであった。確かに、結実している株が多かったが、そのうちにぼつぼつ遅れて咲いているオキナグサを見つけることが出来た。

丘の上のほうは岩が露出しており、乾地性の植物が多く、ツメレンゲやヒナゲシなどがあり、岩にエフェドラがなかば砂にうずもれて赤い実をつけていた。斜面を下るとサルビアが数種類あり、カンパヌラ、フウロソウ、シオガマの仲間もあり、小川のほとりではハナシノブがあり、大型のカンパヌラも開花していた。川岸のひらけたところにはマイヅルソウもあったが、ほかの湿地性の植物は少なかった。

7月19日～

ガンダンジ、ウランバートル、帰国

大体この場所で植物探査の旅の目的はほぼ達成されたので、翌朝出発し、乗馬などを体験しながら、チベット密教の聖地ガンダン寺を訪れた。

大きなお寺で、拝殿までには長い階段があったが、全員なんとかお参りすることが出来た。その拝殿の脇



Lilium pumilum
(イトハユリ)



Ephedra sinica

にも、イトハユリ、ヒナゲシなどが雑草状態で生えており、われわれの目を楽しませてくれた。

その後ウランバートルへもどり、伝統音楽歌舞を鑑賞し、モンゴルのすべての日程を終了した。

翌朝早朝3時に起床して、台風の襲来を心配しつつ、無事成田に帰着することができた。

今回と昨年の花葉会の園芸事情調査の旅は、栽培植物の原種や原産地を訪ねる旅であった。今年もデルフィニュームやスターチス、カンパヌラなどの原種にめぐり合うことが出来た。モンゴルはやはりヨーロッパと極東アジアに中間に位置することが、植物を見てあらためて実感することが出来た。

次回の花葉会の旅行は、また初心に戻り、楽しい旅行を企画したいと思う。

花葉会総会

平成 23 年 10 月 23 日(日)午後 2 時より、平成 22 年度花葉会総会が、千葉大学園芸学部松戸キャンパス E 棟 2 階合同講義室にて開催されました。出席者は学生も入れて 45 名、久保田芳久幹事の司会進行で定刻通り開始。

安藤敏夫会長より、開会の挨拶と大学の近況報告がありました。「昨年の 100 周年記念事業の一環として建設された 100 周年記念戸定ヶ丘ホールがほぼ出来上がり、11 月 6 日(日)に開所式が行われる予定です。3 月 11 日の大震災で被災された方々にお見舞い申し上げます。学内でもわずかですが、被害がありました。また、福島原発の事故では、柏、松戸ともにホットスポットが点在している状況で、対策を講じております」。

午前中に開催された幹事会で推薦を受けた長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。

平成 22 年度事業報告

(平成 22 年 9 月 1 日～平成 23 年 8 月 31 日)

- ①平成 22 年 10 月 17 日 総会
- ②花葉会賞の贈呈

22 年度の受賞者は、野原宏氏(昭和 39 年園芸学科卒)、安藤正彦

氏(昭和 40 年園芸学科卒)、市川恵一氏(昭和 40 年園芸学科卒)の 3 名でした。

- ③平成 22 年 12 月 10 日「花葉」29 号発行。
- ④7 月 13 日～20 日第 20 回モンゴルへの海外園芸事情調査。
- ⑤花卉産業必修 1000 属検定。
- ⑥幹事会の開催は、平成 22 年 10 月 17 日、12 月 18 日、平成 23 年 1 月 29 日、3 月 5 日、4 月 4 日、6 月 26 日、7 月 24 日の 7 回。

なお、「平成 23 年 6 月 25・26 日に予定していた花葉サマーセミナーは、4 月 4 日の幹事会で中止を決定しました。当時、計画停電、余震が続いていた状況で、判断したものです」との報告が安藤会長よりありました。

平成 22 年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	1,670,856
会報広告料(29号)	1,080,000
協力金	165,240
基金より繰入	0
雑収入	24,000
預金利息	213
合 計	2,940,309 円

支出の部

印刷費	20,160
会報関係	934,330
通信費	260,560
運送費	2,800
記念品代	132,300
会議費	259,662
事務費	395,894
賃金	307,200
慶弔費	15,750
税金	29,100
日本花普及センター賛助金	100,000
柏の葉キャンパス桜苗木代	2,500
次年度分セミナー会場費	0
合 計	2,460,256 円
差引残高	480,053 円

基金報告

(平成 22 年 9 月～平成 23 年 8 月)

前年度残高	21,736,368
きよ金	76,000
総会余剰金	1,000
定期利息	19,375
普通利息	283
一般会計へ繰入れ	0
合 計	21,833,026 円

会計監査報告

監事の河野寛司氏・篠田朗彦氏を代表して、河野監事より、「平成 22 年度の会計収支の監査の結果、事務処理および諸帳簿の記載は正確かつ適正に行われていたことを報告します」と、報告がありました。

平成 23 年度事業計画

(平成 23 年 9 月 1 日～平成 24 年 8 月 31 日)

- ①「花葉」30 号発行
- ②花卉産業必修 1000 属検定
- ③第 28 回 2012 年花葉サマーセミナー開催
平成 24 年 6 月 23・24 日(土)(日)



総会は長岡求幹事長を議長にスタート。説明をする安藤会長

会場：千葉大学けやき会館

懇親会会場：千葉大学生協食堂

④第24回海外園芸事情調査

⑤花葉会賞の贈呈

⑥3.11.被災花卉生産者のための募
金事業

⑦東日本大震災被災花卉生産者支
援事業（奨学金支給）

⑥3.11.被災花卉生産者のための
募金事業について、安藤会長より、
次のように説明がありました。

義援金のお願いの手紙を花葉会
会員、花葉サマーセミナーに参加
された方々、そして全国の花卉生
産者に送りました。

時間はかかりましたが、ようや
く被災地の全容がわかってきまし
た。悲惨です。同じ産業の仲間と
して、被災した花卉生産者を支援
したいのに、義援金を届ける仕組
みがないというのが現状です。そ
こで、花葉会が義援金を募り、ま
たそれを補填して「3.11.被災花卉
生産者支援基金」とし、その全額
を、被災者を掌握している現地の
花卉生産者組織に届けようとする
ものです。被害の大きい岩手県、
宮城県、福島県、茨城県、千葉
県の花卉生産者を代表する既存組
織あるいは新規組織に義援金の「
受け皿」となっていただき、配分ル
ールに従って、被害の甚大な花卉
生産者に義援金を直接届けていた
だくことをお願いしました。

義援金の募集期間は平成23年9
月1日～11月30日、目標金額は
総額1000万円、義援金の配分は
平成23年12月を目標としており
ます。

平成23年10月21日現在、151
名の方々から2,438,000円の義援
金をいただいております。最終的な
金額はまだまだ未定ですが、花葉
会基金から補填して、全額をルー
ールに基づいて配分する予定です。
最終的な結果は来年度の総会、お
よび「花葉」で報告させていただきます。

⑦東日本大震災被災花卉生産者
支援事業（奨学金支給）について、
渡辺均副会長より、次のような説
明がありました。

東日本大震災で被災した花卉生
産者への長期的支援策として、千
葉大学園芸学部_に在学中の被災し
た花卉生産者の後継者へ奨学金を
支給するものです。

対象は、岩手県、宮城県、福島
県、茨城県、千葉県の東日本大震
災で被災した花卉生産者などの子
弟であり、将来後継者として明確
な意思があり、向学心のある花卉
を専攻志望する本学学生（千葉大
学園芸学部花卉園芸学研究グル
ープに所属、もしくは同別科花卉専
攻に在学）若干名です。対象期間
は平成24年4月～平成28年3月。
支援内容は、(1)就学支援として、
花葉会会員による就学支援・就農

支援、(2)奨学金支給として、月
額3万円。財源は花葉会基金から、
最大216万円（3万円×24か月×
最大3名）としています（詳細は
46ページに記載）。

平成23年度予算

（平成23年9月1日～平成24年8月31日）

収入の部

前年度繰越金	480,053
会報広告料（30号分）	1,000,000
サマーセミナーテキスト売り上げ	50,000
その他の収入	109,747
基金より繰り入れ	12,000,000
預金利息	
合計	13,640,000円

支出の部

印刷費	100,000
会報関係	1,100,000
通信費	500,000
運送費	10,000
記念品代	180,000
会議費	450,000
事務費	490,000
賃金	500,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	100,000
予備費	10,000,000
合計	13,640,000円

基金より予備費および会の運営
費として1200万円繰り入れ。予
備費は「3.11.被災花卉生産者のた



花葉会賞を受ける奥藤敏二郎氏。奥中央は畑井昭一郎氏。奥右は熱田健氏



花葉会賞受賞のあいさつをする宮田増美氏

めの義援金」および「東日本大震災被災花卉生産者支援事業（奨学金支給）」のものです。確定した金額ではありませんが、その範囲内で使いたいと、國分尚副会長より、説明がありました。

役員改選

今年は2年に1回行われる役員改選の年です。しかし、安藤敏夫会長が平成24年3月末で退官となりますが、その後の人事等、全く不透明です。したがって、今年度総会での役員改選は行わず、1年延期とします。

以上の議題は、拍手をもって承認されました。

花葉会賞贈呈

総会に引き続き、花葉会賞の贈呈がありました。長岡求幹事長より、熱田健氏（昭和39年園芸学科卒）、奥藤敏二郎氏（昭和40年園芸学科卒）、畑井昭一郎氏（昭和40年園芸学科卒）、宮田増美氏（昭和40年園芸学科卒）の4名を紹介。安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

受賞者を代表して熱田健氏より、挨拶がありました。



受賞者を代表してあいさつする熱田健氏



1000属検定B級合格者認定証を受ける加瀬沙矢香氏

花卉産業必修1000属検定試験 B級合格者認定証授与

「1000属検定とは、花卉産業人として知っておくべき花卉について、C級300属、B級300属、A級400属に分類。これを覚えさせようというものです。C級は学内で認定証を授与。B級とA級は総会の席で認定証を授与するものです」との説明の後、安藤敏夫会長より、今年度のB級合格者、別科2年の加瀬沙矢香氏を紹介。認定証が授与されました。

受賞記念講演

奥藤敏二郎氏より、「ジェスネリアードと共に」と題して、講演が行われました。

懇親会

定刻の午後4時より、緑風会館2階にて、山下容子幹事、松原紀嘉幹事の司会進行で懇親会が始まりました。

乾杯の発声は吉池貞蔵氏が行いました。途中、花葉会賞受賞者の宮田増美氏の挨拶。宮田氏をはじめとして、花葉会賞受賞者3名が昭和40年卒ということで、懇親会会場は同期生が9名も集まり、同期会状態に。話の輪が広がり、学生の就職活動などもあり、終始和やかな雰囲気で行進。盛会のうちに終了しました。

(文責：編集部)



懇親会司会は山下容子幹事と若手の松原紀嘉幹事



懇親会乾杯の音頭は吉池貞蔵氏

東日本大震災に被災した花卉生産者の子弟への就学支援（実施案）

1. 目的

東日本大震災に被災した花卉生産者への長期的支援策として、千葉大学園芸学部にて在学中のその後継者へ奨学金を支給する。保護者が何らかの理由で収入が断られた場合には、当事者が申請すれば千葉大学の現行制度では、授業料（入学金）免除が適用される。しかし、花卉を専攻する学生を対象とした日々の就学支援のための無償の奨学金制度は存在しない。被災した花卉生産者は、日々の生活にも困窮し、軽度な被災者でも生産施設の復旧と生産再開に全力を注いでいるのが現状である。卒業後の早期の就農（就職）・自立を促すため、各方面で活躍する花葉会会員との人的交流を積極的に行なう。また、就学支援のため、在学期間中は奨学金を支給する。花葉会会員が花卉研究室と協力し、業界全体で即戦力となり得る花卉後継者を育成し、被災した生産者・地域等への復興の一助となるような魅力あるプログラムを提供する。

2. 対象

東日本大震災に被災した花卉生産者などの子弟であり、将来後継者となる明確な意思があり、向学心のある花卉を専攻志望する本学学生（千葉大学園芸学部花卉園芸学研究グループに所属、もしくは同別科花卉専攻に在学）若干名を対象として支援する。

3. 支援対象地域

岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県

4. 対象期間

平成 24 年 4 月～平成 28 年 3 月

例) 園芸別科生の場合…平成 24 年 4 月入学生～平成 26 年 4 月入学生

例) 学部 3 年生の場合…平成 24 年 7 月分属学生～平成 26 年 7 月分属学生

5. 対象人数

平成 24 年～平成 26 年に入学もしくは分属する学部学生もしくは園芸別科花卉専攻学生 若干名

6. 支援内容

(1) 就学支援

花葉会会員による就学支援・就農支援;通常の大学の講義の他に、休日や長期休暇を利用して先進的花卉生産者・花卉関連企業、試験場等への見学・研修・インターンシップ等へ学生の派遣を花葉会が行なう。花葉会会員が在籍する企業・生産現場へ積極的に派遣し、在学中に花卉生産に関する現場の感覚を養わせる（花葉会会員はボランティアで対応）。

(2) 奨学金支給

奨学金支給金額（月額）：3万円/名

7. 財源

花葉会基金から最大 216 万円支出。

8. 選考方法

花葉会幹事から若干名を互選し、書類審査および面接を行って決定する。

(1) 必要書類

①被災証明書、②花卉生産などに従事している（もしくは従事していた）ことがわかる書類（確定申告書など農業所得を証明できる書類、それに代わる花卉生産組合員証、組合員名簿、市場などの出荷案内書、出荷履歴の写しなど、③志望書（花卉後継者として従事する意思が書かれているもの）

(2) 面接

志望意思の確認。

9. 奨学金の支給期間

学部 3 年生の場合…分属が決定される年度の 7 月～卒業年度の 3 月までの 2 年間

園芸別科生の場合…入学年度の 4 月～修了年度の 3 月までの 2 年間

ただし、最短の卒業もしくは修了を前提とし、いかなる場合でも 2 年以上の支給は認めない。

花葉会会則 (2011/10/23)

<名 称>

第一条 この会は「花葉会」という。

<事務局>

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部園芸学科花卉園芸学研究室におく。

<会 員>

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会員で現在花卉関連業務に携わる者、
(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

<目 的>

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

<事 業>

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
①総会 ②親睦会 ③研究会 ④会報、名簿等の発行 ⑤功労者の表彰 ⑥その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

<役員等>

第六条 この会に次の役員をおく。
①会長1名 ②副会長 若干名
③幹事長1名 ④副幹事長3名
⑤年次代表幹事 若干名 ⑥幹事50名以内 ⑦会計監査2名
(2) この会に名誉会長をおくことができる。
(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

<役員等の選出と役目>

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表する。
(2) 副会長は総会の総意により推

戴し、会長を補佐し、会務を処理する。

(3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表して会務を処理する。

(4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6) 幹事は会員の中から互選する。

(7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9) 会計監査は会の会計を監査する。

(10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

<役員任期>

第八条 役員任期は2年とし、再選を妨げない。

<会 計>

第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3) 会計年度は毎年9月1日より翌年8月31日までとする。

(4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

<会 議>

第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3) 総会の議事は出席会員の2/3以上の賛成がなければ議決できない。

<会則の変更>

第十一条 この会則は総会の議決

を得なければ変更できない。

<その他>

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

<附 則>

この会則は昭和56年9月6日から実施する。

この会則は平成9年10月26日から実施する。

この会則は平成10年10月17日から実施する。

この会則は平成13年9月29日から実施する。

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会則は、平成16年10月1日より施行する。

この会則は、平成21年10月10日より施行する。

花葉会 役員 (2011/10/23)

相談役 : 岩井英明、魚躬詔一、小田善一郎

会計監査 : 河野幹司、篠田朗彦

名誉会長 : 横井政人

会 長 : 安藤敏夫

副会長 : 國分 尚、渡辺 均

幹事長 : 長岡 求

副幹事長 : 田中桃三、望田明利、武内嘉一郎

年次代表幹事 : 田中桃三、望田明利、武内嘉一郎、小笠原 誓、渡辺 均
(年次順)

企画編集幹事 : 石川君子、小泉 力、鈴木 司、田旗裕也、松原紀嘉、宮田増美、村井千里、山口まり、山田幸子、

庶務会計幹事 : 上田善弘、小沢 勇、西原彩子、野本寿久、福永哲也

事業基金募集幹事 : 熱田 健、猪熊雅雄、大林修一、小笠原 誓、小黒 晃、久保田芳久、齋藤俊一、荘 智裕、鈴木邦彦、富山昌克、山下容子
(五十音順)

■ 花葉会賞受賞者紹介

盆栽のヨーロッパ導入の先駆けとして活躍している

賛花園主 熱田 健 氏

熱田健さんは東京に生まれ、都立園芸高校、千葉大学園芸学部を1964年に卒業され、ただちに父上が経営されていた、新宿三越の園芸部に入られた。同店は特に山野草の販売に特色があったが、そこで経営について経験をつみ、1975年に奥さんご子息3人でオーストリアのザルツブルグに移住した。

現地では地元の苗木生産者に勤務し、各地方を回って見学し、勉強した。その間自作で盆栽を栽培し、ザルツブルグ市内で盆栽展を開き、好評を得ることができた。

1978年帰国後、ウィーンのベルベデーレ高山植物園内に常設の盆栽展示場を設置することを市当局に提案。受理され、2年後にヨーロッパ最初の公営の常設盆栽展示場が開場した。

1979年にはフジテレビの番組「ドキュメント日本人」シリーズの取材を受けた。彼がウィーンやザルツブルグを中心に盆栽の普及、指導に孤軍奮闘している様子が丁寧に収録され「ウィーンの森の盆栽士」として全国放送され、盆栽界以外の人々にも反響をよんだ。

その後、大型の冷蔵コンテナを使用して盆栽の輸出を手がけることとなった。これにより、それまでの木箱梱包による輸送に比べて破損事故が激減し、健全な商品を送ることができるようになった。なお搬送中の設定温度は5℃である。

現在までドイツ語圏を中心にマツ（ゴヨウマツ）、シンパク、サツキ、モミジ、カエデ、ソロなどの盆栽を

輸出していたが、ここ10年ほどは庭木の需要が圧倒的に増え、樹種もキャラやドウダン等が大半をしめるようになった。

この間、ヨーロッパ情勢はユーロ共同体の結成などで激変した。現在はEU各国及びスイスでは鉢の中の土及び根巻きの土については、輸出国の公的機関（農水省植物防疫所等）の所定の検疫を受けその証明書をつけなければ、輸入は禁止されていないとのことである。

彼の30年にわたる努力で、ヨーロッパ各地に盆栽の同好者の団体も増加し、活発に活動している。そして彼は毎年渡欧し、各地をまわり、それらの団体と交流し、栽培、管理などの指導と啓発活動を現在も続けている。

このように、ヨーロッパにおける盆栽や日本庭園の普及に、熱田さんの役割は大変大きいものがある。

(文責 田中桃三)



岩機でのディッピング（線虫対策）



スイス盆栽売場



コンテナ内部

◆ 花葉会賞受賞者紹介

ジェスネリアードと共に

奥 藤 敏二郎

経歴

昭和 18 年 京都府久美浜町（現京丹後市）に生まれる
昭和 36 年 兵庫県立豊岡高校卒業 千葉大学園芸学部入学
昭和 40 年 京都大学大学院農学研究科入学
昭和 42 年 同修士課程修了 兵庫県立淡路農業高校勤務
昭和 53 年 兵庫県フラワーセンター勤務 イワタバコ科植物の
導入、育種、普及に努める 淡路ファームパーク（フ
ラワーセンター分園）園長、同センター園長
平成 15 年 兵庫県を定年退職、自宅で赤穂ジェスネリアード開設

京都大学にいた頃ご縁があった方に誘われて淡路島の農業高校に勤めることになった。高校教師としての仕事はそれなりに楽しかったが、花の“専門家？”として今ひとつ満たされない思いが強くなっていった折、当時出来たばかりの兵庫県フラワーセンターで働く機会をいただき、教師を辞めて同センターに移った。しかし、当時同センターの植栽管理は農試から派遣された職員の縄張りで、行政職の私はデスクワークばかりの期間が続きフラストレーションがたまっていた。

5、6年たった頃にやっと植栽管理の部署に移り、そこで最初の仕事がジェスネリアード（イワタバコ科植物）展示室の開設準備であった。当時、ランの展示室が新しく作られ、それまでランを展示していた部屋が空くので、そこにランと生育環境が似ているイワタバコ科植物を展示する計画であった。とはいっても園のジェスネリアードコレクションはわずかで専用展示室を満たすには程遠く、植物の収集が急務であった。植物園の技術者としての経験がなかった私には人脈もなかったが、つてを頼りながら日本ジェスネリアード協会、他の植物園、個人の収集家など少しずつ収集範囲が広がっていった。国内で収集できる種類には限度があったが、外国の植物の会などを通じて知った人々

との交流を通じてコレクションは飛躍的に増え、数年後に何とか展示室の開設にこぎつけることができた。今に至るまで、ジェスネリアード専用の展示室を持つ施設は他には見られない。

その数年後には他の部署に変わりジェスネリアード担当としての仕事は終わったが、ジェスネリアードの魅力からは離れがたく、仕事の合間を見つけてジェスネリアード室に通う日が退職するまで続いた。この間、植物を収集する傍らそれらを使った育種も行った。特に世界最多のコレクションと自負していたストレプトカーパス原種の多様性を従来園芸品種に取り込むことから始めて、ストレプトカーパスの交配を続けてきた。育成した多数の品種の中には、外国の愛好者からも注目を集めた品種もある。

ジェスネリアードは世界におよそ150属、3000種以上が分布し、概ね低照度で開花し、美しく変化にも富んでおり、属によっては多くの園芸品種もあって、園芸的に大きなポテンシャルを持っている。しかし、セントポーリア、シンニンギア、ストレプトカーパスなど一部を除けば名前すら知られていないものが多い。

日本にはセントポーリアを除くとジェスネリアードを扱う専門業者はないに等しい。それならばささやかながら自分でと、退職後自宅に小さな温室を建てジェスネリアードの栽培、育種と販売を続けている。場所の制約のため、扱うのはストレプトカーパスやキリタなど比較的育てやすいものを中心だが、ジェスネリアード普及の芽になればと思っている。



ストレプトカーパス ケンタニエンシス



キリタ オピオボゴイデス

■ 花葉会賞受賞者紹介

地域花き生産の向上を目指して

畑 井 昭一郎

経歴

昭和 17 年 5 月 青森県東津軽郡平内町に生まれる
昭和 36 年 3 月 青森県立青森高校卒業
昭和 40 年 3 月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業（花卉園芸学専攻）
昭和 41 年 3 月 千葉大学園芸学部専攻科修了
昭和 43 年 3 月 東京教育大学大学院農学部農学研究科修了
昭和 46 年 4 月～昭和 48 年 3 月
京都大学農学部 園芸第 1 教室助手
昭和 48 年 4 月 青森県畑作園芸試験場園芸部勤務
平成 6 年 9 月 平成 6 年度全国農業関係試験研究所長会研究功労賞受賞
平成 8 年 7 月 「フラワーセンター 21 あおもり」に配属
平成 15 年 3 月 「フラワーセンター」次長を最後に県を定年退職
平成 15 年 4 月～平成 19 年 3 月
コープ・ケミカル株式会社 青森営業所技術顧問

徳坂八郎先生の後に来られた小杉清先生に卒論指導を受けた最初の学生で、実際の指導していただいたのは当時、助手の横井政人先生でした。東京教育大学大学院では山崎肯哉先生、岡田正順先生、鈴木芳夫先生に指導を受けました。京都大学では塚本洋太郎先生及び浅平端先生のもとで 2 年間、助手を務めました。

青森県における花の試験は、私が来た昭和 48 年から本格的に始まりました。ちょうど「青森国体」があり、花を県内に広めようと、花壇用草花の国体時期にあわせた開花を目指した試験が多くありました。その頃の青森県内の花き生産はほとんどありませんでした。青森県におけるキクの作型についても、これといった研究はされていませんでした。

私が試験場に来てから、寒冷地の気象条件を活かしたキク生産、特に旧盆用、8 月の上旬あたりの出荷を目指した夏ギクの作型をはっきりさせようとして始まりました。

はじめに、夏ギクの露地栽培の研究から取り掛かりました。暖地と比べて夏が寒冷のため生育期間が短いの、前年秋に冬至芽をハウスに仮植え、4 月に定植することが暖地と違うところです。

ある程度試験が進みまして、8 月出荷よりも少し早く、7 月から 12 月出荷の 1 年を通した、暖房を使わない施設栽培作型を考えました。その後、彼岸を目指し、品種「天寿」を使った 9 月出荷。最終的に、秋・寒ギクを使い、補助的暖房利用による 10～12 月出荷の施設利用作型を研究しました。

最初、約 3 億円だった生産額が、平成 6 年度では 21 億円とキクを主体に伸びてきましたが、その後、宿根カス

ミソウやカーネーションも多く作られるようになりました。

宿根カスミソウの場合、株冷蔵処理による 9～10 月出荷の抑制栽培技術に取りかかり、寒冷地特有の技術確立し、産地の花き生産も伸びました。

その時に、京都大学の方から共同研究をしないかということで、全国 10 地域の一つとしてダイアンサスと宿根カスミソウの生理生態、特に地域にあった系統や作型を調べる分担研究をしました。この研究も産地形成に役になったと思います。

さらに、「岩手のリンドウ」のような、青森県をイメージさせる花がないかと、いろいろ試験をしました。その時にアルストロメリア、トルコギキョウなどの無加温ビニールハウスにおける作型、開花特性の研究をしました。しかし、いずれの花も全国的に生産されるようになったので、青森県のカラーをだす花というわけにはいきませんでした。

平成 6 年には以上の業績の元に、「全国農業関係試験研究所長会研究功労賞」を受賞しました。

その後、県は花きの生産拡大を図るため、試験研究、研修、優良種苗供給の機能を持つ花き試験場として平成 8 年 7 月「フラワーセンター 21 あおもり」を青森市に創設。これは全国的にも珍しい花き専門試験場でした。これを立ち上げる時から花き研究の企画・推進に加わり、完成後は一員として管理・運営・指導をしてきました。

その内容は、①デルフィニウム、リンドウ、バラなどの本県独自品種の開発、②キク、バラ、トルコギキョウ等の低コスト、周年栽培技術の確立、③新タイプのデルフィニウムやカンパニユラ、リンゴの枝物など新しい需要が喚起できる新品目の開発が主でありました。

平成 9 年から 11 年まで、国の補助のもと本県が主担で、岩手県と山形県の 3 県で「寒冷地施設利用花き生産のシリーズン高品質安定生産技術の確立」の共同試験を行い、ある程度の成果を得ました。

本県の花き産出額は、昭和 50 年が 2 億 4 千万円、昭和 60 年：5 億 8 千万円、平成 2 年：11 億 6 千万円、平成 7 年：33 億円、平成 10 年：40 億円、平成 16 年：39 億 9 千万円となっています。この花き産出額の増加がわれわれの努力の結果と考えたい。

◆ 花葉会賞受賞者紹介

花卉関係書籍編集に花卉園芸の発展を夢として

元誠文堂新光社 編集長 宮田 増 美 氏

宮田増美さんは都立園芸高校、千葉大学園芸学部園芸科（花卉専攻）卒業後すぐに誠文堂新光社に入社し、平成16年定年で退職されるまで同社一筋に園芸雑誌、書籍の発行に携わり、花き園芸界に多大の功績があった方です。

昭和40年4月学部卒業後ただちに同社に入社し、直後は「ガーデンライフ」編集部配属されました。当初、同誌は季刊でしたが46年に月刊となり、そのころからようやく盛んになったガーデニングブームの火付け役となり、その後はけん引役として同様な雑誌の中心的な存在となりました。

宮田さんはその中にあり、その知識と交友関係の広さから中心的な存在となり、各種の特集記事や現場の紹介などにその手腕を発揮され、また同誌の別冊として発行された、「原色斑入り植物写真集」や「原色ベゴニア写真集」の編集を担当し好評を博しました。

その後61年1月に「ガーデンライフ」の編集長、63年1月に生産園芸の啓発書として歴史のある「農耕と園芸」誌の編集長となって活躍。平成10年10月より「フローリスト」、平成13年4月より「いけばな新世紀」のそれぞれ編集長を歴任されました。

宮田さんは同社の先輩であり、学部先輩でもある植村猶行氏、島村宣幸氏などのあとを受け、雑誌のほか各種の園芸関係の書籍の編集に関わってきました。

宮田さんが関わった出版物は園芸関係の生産者、業者、消費者、趣味家いずれにも受け入れられるような書物が多く、園芸界に多大な功績があったものと思

います。

以下では花葉会員に関係のある、宮田氏が担当した書籍の一覧を紹介します。

「切花栽培技術マニュアル」

切花栽培技術マニュアル編集委員会編 1992年

「鉢花栽培技術マニュアル」

鉢花栽培技術マニュアル編集委員会編 1994年

「花の成型苗生産と利用」

安藤敏夫、農耕と園芸共編 1993年

「原色鉢花写真集」

(社)日本花卉卸売市場協会編 1995年

「原色洋ラン写真集」

(社)日本花卉卸売市場協会編 1997年

「カラーリーフプランツ」

横井政人著 1997年

「新しい鉢花」

安藤正彦著 1999年

「世界の食虫植物」

食虫植物研究会編 2003年

「ベゴニア百科」

日本ベゴニア協会 2003年

「A to Z 園芸植物百科事典」

横井政人監修 2003年

「世界のプリムラ」

世界のプリムラ編集委員会編 2007年

「ダリア百科」

日本ダリア会編 2009年

「観葉植物と熱帯花木図鑑」

(社)日本インドアグリーン協会編 2009年

(文責：田中桃三)



編集を担当した本の一部

ジェスネリアードと共に

奥藤 敏二郎 氏

賞をいただきありがとうございます。ジェスネリアード (Gesneriad) について、少しでも認識を深めていただければと思います。

Gesneriad は英語でイワタバコ科植物のことですが、日本ではあまり使われません。日本では、イワタバコ科の植物をゲスネリア (*Gesneria*) と言っていますが、ゲスネリアは、イワタバコ科内の1属にすぎないので、ジェスネリアードにこだわって使っています。

勤めていた兵庫県フラワーセンターがジェスネリアードの展示室を開くにあたり担当になったことが、ジェスネリアードとの付き合いの始まりです。その頃は、ジェスネリアードが日本には殆んど入っていなかったので、集めるのが大変でした。

担当やフラワーセンターを辞めてからも、イワタバコ科の植物と付き合っています。

イワタバコ科は、150属 3000種あまりあるといわれている大きな科です。分布の中心は、メキシコからブラジル、中国から熱帯アジア、アフリカです。

ジェスネリアードがどのような花か、画像を見ながらご紹介しましょう。

アフリカ原産

アフリカには、セントポーリアとストレプトカーパスの2属しかありませんが、どちらも園芸的には重要な属となっています。私が、一番力を入れているのがストレプトカーパスです。

ストレプトカーパス (*Streptocarpus*) の自生地は、アフリカ大陸で、赤道付近にストレプトカーペラ (*Streptocarpella* 亜属) と呼ばれる茎が伸びる熱帯性の有茎種があり、南東部には、温帯性のストレプトカーパス亜属 (無茎種) があります。後者は岩壁の途中の割れ目などにコケや他の草と共に生育しています。

ストレプトカーペラ亜属はハンギング仕立ての鉢物として最近よく見かけます。日本では交配種の S. 'White'、S. 'Concord Blue' などが入手できます。

ストレプトカーパス亜属は多年生で長い葉が叢生するものですが、一葉種は、双葉のうちの一枚が大きくなり、花が咲き終わると種子をつけて枯れます。この中の赤い花を咲かせる *S. dunnii* がストレプトカーパスの赤花の作出に関わっています。

私が扱いだしたころ、ストレプトカーパス亜属の品種はあまり多くありませんでした。その頃出回ってい

たものは、葉が長く伸びてしまいだらしなかった。原種の中に葉が小さいものがあつたので交配を続けて小型の新しい品種を作るようになりました。いくつか交配をしているうちに小さいものができ、'サクラ' 'アスカヒメ' など、2~2.5号の鉢でバランスよく育つものができましたが、あまり人気は出ませんでした。

Skentaniensis の細く肉厚の葉の性質を受け継いだ、3~4号鉢でバランスが取れるものも出来ました。しかし、やはり人気のあるのは色が豊富で豪華で、葉も花も大きい大型品種です。ストレプトカーパスの交配は簡単で、交配すると様々なものができます。花色はほぼ揃っていますが、黄色が無いので交配を続けています。中心に黄色が入るものがいくつかできましたが、花の上部には殆んど入りません。イギリスの業者の品種の中に黄色になっているものはあるようですが。

新大陸原産

鱗茎 (つくしの頭のような球根) ができるタイプ

アキメネス (*Achimenes*) は、鉢物にすると格好がとりにくいですが、球根を沢山詰め込んでハンギングにするとよいでしょう。

原種にはいろいろな色があります。

ユーコードニア (*Eucodonia*) は、*E. andrieuxii* と *E. verticillata* の2種しかありません。コンパクトで葉に白い毛が生えて可愛い。

グロキシニア (*Gloxinia*) の原種は、茎が直立します。

シーマニア (*Seemannia*) *S. sylvatica* が昔から市場に出ている、息の長い商品として残っています。作りやすいのが取り柄です。*Seemannia* から *Gloxinia* へと属がうつり、そしてまた *Seemannia* にもどりました。

コーレリア (*Kohleria*) は、花の正面に濃い点々が入り、どきつく派手な花です。銅葉の種類があり、これを交配した銅葉品種もあります。栽培が難しいとも言われますが、球根を春に植えると夏前には咲かせることができます。

スミシアンサ (*Smithiantha*) は、背丈が高くなり、花のバラエティもあり美しい種類です。交配種が花屋に出回っていましたが、12月前後に花が咲き、高温が必要なので、購入された方が花を維持するのが難しいようで最近あまり見ません。

イワタバコ科の特徴は、属間雑種ができやすいこと、



講演をする奥藤敏二郎氏

たくさんの交配種が作られています。スマシアンサ×アキメネスや、スマシアンサ×ユーコードニアなどの交配をしたことがあります。

球根のできないタイプ

アルソビア (*Alsobia*) は昔から、長いストロンがでる *A. dianthiflora* が花屋さんに出ており、今でも時々見かけます。2種しかないのですが、最近、ストロンが出ないタイプ (*Alsobia* sp.) が数種発見されました。

コルムネア (*Columnnea*) は、オレンジ系、黄色系の花色の派手なグループで、茎が長く、葉が小さいので、花が一斉に咲くと豪華です。少し高温性で、一般の家庭での栽培には問題があります。

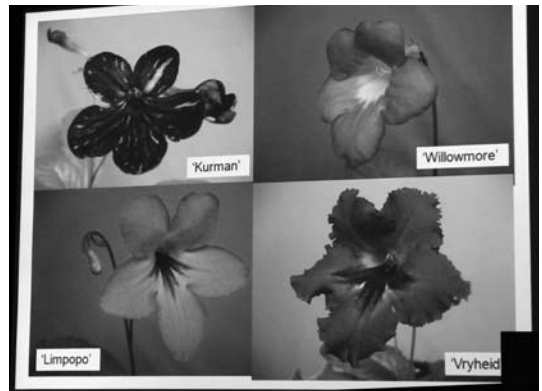
エピスシア (*Episcia*) は、以前、アルソビアと同じ属になっていましたが、ストロンの出方がちがうと別属になりました。斑入り葉などの変異が出ることもあります。これは葉が美しいのですが、高温多湿を好み作りにくいので、テラリウムでの栽培が適しています。

ネマトンサス (*Nematanthus*) は、ふぐ提灯のような花型をしています。花梗が長いものと短いものがあります。以前のヒポシルタ属はこの属に吸収されました。丈夫で作りやすい *N.gregarius* がいろいろな名 (ヒポシルタ、金魚の樹など) で売られています。

コドナンテ (*Codonanthe*) は、ネマトンサスに近い属で、白い花の種類が大多数ですが、クリーム色の花を咲かす種もあります。 *C.gracilis* が花屋さんに見られる植物としてよく出ています。花、葉と共にオレンジ色の実が可愛いですが、実をコンスタントに着ける方法がよくわかりません。アリとの共生関係が知られていますが、アリが授粉するわけではありません。

ネマトンサス×コドナンテの属間雑種は、両者の中間的な形質になることが多く、生育旺盛なものが多いです。

ゲスネリア (*Gesneria*) は、小型のものから木立性で大きくなるものがありますが、水切れに弱いので注意が要ります。



ストレプトカーパスの交配種
講演は数多くの写真とともに紹介された

塊茎の出来るタイプ

シンニンギア (*Sinningia*) は、シクラメンのような球根ができて、殆どのが冬は休眠します。多くの種類は球根が増えませんが、小球が沢山できるものも一部あります。背丈が高くなるもの、芳香のあるもの、多肉植物として扱うもの (*S. leucotricha* '断崖の女王') など、多様なタイプがあります。ミニシンニンギアと呼ばれる小型のものもあります。 *S.speciosa* の園芸種で花が大きく上を向いて咲くものがグロキシニアとして販売されていますが、本当のグロキシニア属と区別するため、「フローリスト グロキシニア」と呼ぶことがあります。

アジアの種類

エスキナンサス (*Aeschynanthus*) はアジア産の中では最も派手で、オレンジ色系の花が咲くものが多くあります。

キリタ (*Chirita*) はストレプトカーパスの次に育種に力を入れている属です。

中国南部に多く自生し、石灰岩の山の斜面の割れ目や洞穴の入り口などに自生が見られます。

キリタは、耐寒力もあり、原種のままでも観賞価値の高いものが多くあります。F₁はできるのですが、次の世代の種子ができず、交配が進みません。

ペトロコスメア (*Petrocosmea*) は花より葉に人気があり、小型の葉が放射状に綺麗に整列します。キリタに比べると少し弱い。殆ど中国に自生していますが、インド、タイにも一部分布しています。

イワタバコ科の植物は、一部しか栽培されておらずポテンシャルがあると思いますが、なぜか人気が出ないのです。皆さんの力でいつか、ポピュラーになるといいなと思います。特にキリタやペトロコスメアはある程度の耐寒性があるので、お勧めの属です。

(文責：編集部)

会報「花葉」発行にともなう協力金のお願い

日ごろより花葉会の事業にご協力いただきましてありがとうございます。深く感謝いたしております。

さて、花葉会では、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室を中心に、花卉産業界に携わる会員相互の親睦、研鑽と情報交換等を目的に、会報「花葉」を発行してまいりました。

本来この会報の発行は、広告料収入により、印刷・郵送費等を充当し、会員の皆様には無料で配布することにしてまいりました。しかし、昨今の経済情勢のため、広告収入は減少し、資金的に逼迫しているのはご承知のことと存じます。

そこで、私どもといたしましても一層の合理化をはかり冗費の節約につとめる所存ですが、会員、読者の皆様には協力金の拠出をお願いする次第です。

また、今後とも「花葉」の内容につきましてはさらに充実させ、会の活動も一段と活発にしてゆくつもりですので、ご理解のほど、なにぶんにもよろしく願います。

なお、ご送金につきましては、同封の郵貯銀行振替用紙にて、下記の要領でお願いいたします。

花葉会幹事一同

1. 振替口座番号：00150-9-13341 口座名：花葉会

2. 花葉会会報「花葉」発行協力金 3カ年分として 5,000円（「花葉」30号～32号）

3. 問合せ先：〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内 花葉会事務局 TEL&FAX：047-308-8810

編集後記

◆東日本大地震、原発事故、台風と、今年
は本当に大変な年でした。被災された皆様
には心よりお見舞い申し上げます。そして
被災された地域が一日も早く復旧復興しま
すように、お祈りいたします。◆花葉会では恒例のサマーセミナーを中止。被災された方々にどんな支援ができるか、幹事会で話し合いました。そして、被災花卉生産者

のための募金事業と就学支援事業を企画、
推進しております。ご協力のほどよろしく
願います。◆さて、安藤敏夫会長
が来年3月で退官。長い間花葉会にご尽力
いただきました。ただ、その後の人事等は
全く不透明ですから、花葉会にとっても来
年は激動の年となりそうです。◆今号も皆
さまから貴重な原稿をいただきましてあり

がとうございました。【花葉】は例年7月に
企画案を立て、原稿依頼等しております。
【花葉】へのご寄稿等はお早めに、花葉会
事務局宛にご連絡ください。◆【花葉】は
花葉会ホームページ <http://www.kayoukai.net/>
から見るができます。ご活用くだ
さい。

花葉 2011 No.30

平成23年12月10日発行

発行人 安藤敏夫

編集人 山田幸子

発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉研究室内

<http://www.kayoukai.net/>

編集 (有)フローラルプランナーズチーム

レイアウト・印刷 (株)ランド